

Riwac Research Series

RIWAC 研究シリーズ

島根大学教育学部小学四年課程
初の女子卒業生のライフヒストリー
樺太出身の小学校教師・島田徳子氏の場合
島田博司

2025年1月

RIWAC
Research Institute for Women and Careers
日本女子大学現代女性キャリア研究所

島根大学教育学部小学四年課程
初の女子卒業生の
ライフヒストリー

樺太出身の小学校教師・島田徳子氏の場合

島田 博司

日本女子大学

現代女性キャリア研究所

目 次

1. はじめに～本稿のねらい	5
2. 島田徳子氏の証言記録	7
(1) 樺太での生活	7
1) 誕生から国民学校卒業まで	7
2) 高等女学校生活のはじまりから日本への引き揚げまで	10
(2) 引き揚げ後の生活	16
1) 父の実家のある山梨から秋田へ	16
2) 父の転勤にともない、島根へ	18
3) 島根大学時代	21
(3) 36年間の教師生活	25
1) 日原小学校時代	25
2) 伊野小学校時代	27
3) 来待小学校時代	30
4) 乃木小学校時代	32
5) 雑賀小学校時代	34
6) 城北小学校時代	37
7) 七類小学校時代	39
8) 法吉小学校時代	41
(4) 退職後の生活	49
3. おわりに	50
(1) 島田徳子氏の立ち位置のユニークさ	50
(2) ドキュメントとしての価値	50
<引用・参考文献>	53
<注>	55

執筆者

島田博司（甲南女子大学人間科学部総合子ども学科・教授）

1. はじめに～本稿のねらい

本稿では、戦後に新制大学が発足した当時、4年制大学に進学する女子がまだ少ないなか、島根大学教育学部小学四年課程をはじめ卒業した女性に着目し、彼女がどのような環境で生まれ育ち、続いて小学校教師としてどのような学校生活や家庭生活を送り、そして退職後はどのような暮らしをするようになったかを、インタビュー調査によって明らかにすることを目的としている。

とりあげるのは、島田（旧姓：石原）徳子¹⁾（とくこ）氏で、著者の母にあたる人物である。彼女は、戦前に樺太（南樺太）〔現：サハリン〕で生まれた。幼少期は、石炭鉱業につく父親の転勤があったものの、恵まれた環境のなかで育っている。だが、樺太庁豊原高等女学校に通っていた2年生の夏、ソ連の侵攻を受けつつ終戦を迎えたことで、事態は急変していく。樺太島内の高等女学校を次々と転校したのを皮切りに、両親の実家のある山梨への引き揚げや父の仕事の関係で移った秋田では戦後の学制改革で旧制から新制への移行措置があったなかで転校を重ね、最終的には新制の島根県立松江高等学校を卒業している。以後島根の地に落ち着くが、進学先の新制の島根大学教育学部小学四年課程では、初の女子卒業生となった2期生2名のうちの1人となった。卒業後は小学校教師となり、最後は定年まで2年を残して退職した。

そこで、以下では彼女のあゆみを、4つの生活期間にわけてみていくことにする。それは、①樺太での生活〔1931年～1947年5月：15歳まで〕、②引き揚げ後の生活〔1947年5月～1954年3月：22歳まで〕、③36年間の教師生活〔1954年4月～1990年3月〕：58歳まで〕、④退職後の生活〔1990年4月～〕、の4期間である。その際、できるだけ時系列的に個人的な経験を本人に語ってもらうことと、その語りを第二次世界大戦や高度経済成長期、安定経済成長期などの時代背景や、学習指導要領の改訂といった社会的な文脈のなかに位置づけることを心がけた。また、現代的な問題ともリンクするように、ソ連の侵攻や教職におけるジェンダーギャップ、教師の多忙化、教師グループ内でのフォロワーシップ、教師の資質・能力の向上といった観点をとりあげるようにした。なお、本稿では、徳子氏が樺太出身であることが新制大学への進学や、教育学部小学四年課程初の女子卒業生となったことが教師生活にどんな影響を及ぼしたかに注目し、生まれてから退職に至るまでの期間を重点的にとりあげている。

ところで、今回のインタビュー調査では、いくつかの利点があった。まずは、相手が肉親であることから、①直接質問して回答がもらえるだけでなく、不確かなところは何度も確認できたこと、②インタビュー内容に関連する資料などを惜しみなく提供してもらえたこと、③インタビュー内容の確認作業を進める際に、母のかつての関係者や関係機関などから速やかに回答や資料がいただけたことなどが指摘できる。それから、母と私がともに教育関係者であったことから、共通理解がとりやすかったことがあげられる。

インタビューは、2022年の8月10日から翌年の9月まで1年以上をかけて、島田徳子氏の自宅にて断続的に実施した。期間中、関係者や関係機関などに確認した話や徳子氏から提供された資料²⁾を分析した内容をからめたり、さらには必要に応じて年月日や地名、校名をはじめとする補足説明などを加えたりして文章化し、何度も本人に内容を確認して

もらった。また、関係者の話をとりあげるときは、当事者に完成原稿を確認してもらい、許可を得て使用している。

なお、聞き手と文は、島田博司（甲南女子大学教授）である。インタビューした内容は、話し手の「心の事実」を含めて「新しい事実」や各種「事情」を発掘し、「歴史の臨場感（鼓動）」が後世に伝わるよう努めた（原 2015：27-30）。

2. 島田徳子氏の証言記録

(1) 樺太での生活〔1931年～1947年5月：15歳まで〕

1) 誕生から国民学校卒業まで〔1931年～1944年3月：12歳まで〕

——樺太で生まれ育った幼少期のことを教えてください。

1931年に、私は樺太で生まれました。両親は、父が茂、母が千佐子といい、私は7人きょうだいの2番目でした。

どうして私が樺太で生まれ育つことになったのかというと、話は両親の結婚までさかのぼります。父の茂は、1899年生まれで、山梨県韮崎市〔旧：北巨摩郡円野村（まるのむら）〕の出で、8人きょうだいの3男でした。円野の祖父母のことは、父からあまり話を聞かされたことがなく、よくわからないのですが、裕福な家だったようです。祖父の濱吉ですが、第二次世界大戦前に亡くなっており、幼少期にしばらく祖父母のもとに預けられたときの印象ぐらいしかないので、自分でなにかしていたという記憶はないです。祖母のまさよ（旧姓：五味）は、もともとは武家の名門の出で、かつては出城（砦）を任されていた家柄だったそうです。結婚の際には、3人の付け人を連れてきたといいます。育児をはじめ家のことはすべて、まわりの人が面倒をみていたそうです。祖母とは、山梨に引き揚げてきたときに3ヶ月ほどいっしょに暮らしましたが、本当に家のことはなにもしないような人でした。そういえば、引き揚げてきて間もないときのことで、父が、祖母の生家があったところはそう遠くないからいってみようというので、確か歩いていったと思います。着くと、そこには草むらのなかに崩れ落ちた石垣ぐらいしか残っておらず、父はとてものがっかりしたようでした。

さて、その父ですが、円野尋常高等小学校〔現在は廃校：新たに韮崎市立北西小学校が開校〕を卒業後、濱吉の弟で鈴木家に入夫していた永吉大祖父さんが東京の四谷に住んでいたのので、そこを頼って上京し、海城中学校〔現：海城中学校・高等学校〕を卒業しました。それから、1925年3月に早稲田大学理工学部採鉱冶金学科を卒業後、樺太鉱業（王子製紙系）に就職し、南樺太の東海岸のやや北寄りにあった知取炭鉱（しるとるたんこう）で技師長として、鉱脈をみつける仕事をしていました。

他方、母の千佐子は、1905年生まれで、山梨県甲州市〔旧：東山梨郡松里村〕の出で、6人きょうだいのうち、1番上の長女でした。祖父の小林傳市の生家は、1670年から1920年まで、250年にわたって酒造業をしていました。傳市は、若いときは近衛兵をし、その後1911年から1914年にかけては村長もしていました。当時のこととして、松里尋常高等小学校〔現：甲州市立松里小学校〕の校舎を新築するために土地や建物などの施設費を寄付し、1910年9月に落成した話が残っています。祖母はかく（旧姓：志村）といい、山梨県山梨市〔旧：東山梨郡日川村〕の出身です。志村家は良家だったようで、明治天皇の巡行があった際にこの家で御小憩されたことを記した碑が建てられていたそうです³⁾。そんな家に育ったかくは、山梨英和女学校〔現：山梨英和中学校・高等学校〕を卒業し、1904年にいとこ同士だった傳市とかくが結婚し、翌年に私の母となる千佐子が生まれました。

母は、新築された松里尋常高等小学校に通いました。尋常科をおえると、かくの母校で

ある山梨英和女学校に進学するつもりだったようですが、前年の夏に村で流行り病が蔓延した関係で高等科に1年間通うことにし、その後山梨英和女学校に入学しました。山梨英和時代の話として母からよく聞かされたのは、『赤毛のアン』の日本語翻訳をした村岡花子（本名：はな）先生のことでした。母は、山梨英和を卒業するとすぐに上京し、1923年4月に東洋英和女学校附属幼稚園師範科〔現：東洋英和女学院大学〕に入学しました。半年後の9月1日に関東大震災に見舞われたときは帰省中で、山梨一帯も惨かったものの、幸いにも無事だったそうです。1925年3月に卒業し、4月からは甲府カートメル女塾（カートメルセンター）内にあった山梨英和女学校附属幼稚園に、続いて1927年4月からは新設された日本メソジスト熊谷教会附属幼稚園に務めていました。そのとき、女学校時代からたしなんでいた英語を子どもたちに教えることはとても楽しかったようです。とはいえ、熊谷に異動したときは園ができたばかりで経営が苦しく、無給で働かざるを得なくなり、実家から仕送りをしてもらって生活していたそうです。母は、英和で学び、育ち、勤めたことは、生涯にわたって大きな影響を与えることになったと述懐していました。

そんな茂と千佐子でしたが、1928年の4月に東京で結婚式を挙げ、5月には樺太での夫婦生活がはじまりました。ところが、新婚生活は順調にスタートとはならなかったようで、現地に着くなり山火事に見舞われ、新婚生活用にもっていった荷物が燃えてしまい、いきなり大変だったそうです。

ここでやっと、私の話になります。私は、知取町（しるとるまち）〔現：マカロフ〕で両親の生活がはじまって3年目に生まれました。永吉大叔父さんが名付け親となり、「徳子」と命名されました。ところが、大叔父は翌年に亡くなってしまい、その代わりにというか、息子の英雄さんが私のことをかわいがってくれました。私は英雄おじさんと呼んでいたのですが、以後も鈴木家の方々にはなにかとお世話になりました⁴⁾。

母は、私が長女ということもあり、厳しく育てたそうです。のちに妹が2人生まれたのですが、ともに3歳で幼くして亡くなりました。母は、残された娘が私ひとりになったことで、かわいさのあまり甘やかすすぎてわがままにならないようにと考え、ますます厳しく育てるようになったそうです。

小学校に入学する前からのことになりますが、社宅の近くには芸者さんが住んでいました。昼間は用がないということで、お稽古事として唄や踊りなどを教えてもらっていました。そのときに習った唄は、今でも少しなら口ずさめます。

1938年4月、家から坂道を歩いておりて15分ぐらいのところにあった、樺太公立知取第三尋常小学校に入学しました。父は、炭鉱で働いている人の子が多いこともあって、他の子に勉強で負けるようなことがあってはいけないといっていました。さらに、母に厳しく育てられたこともあったからかもしれませんが、私はなにかにつけて負けず嫌いで、がんばり屋さんでした。ところが、あるとき、父が母からそのことを聞きつけ、女の子で負けず嫌いは生きにくくなると心配していたそうです。

翌1939年の夏前に、それは雪解けがおわって、道のぬかるみが消える5月か6月ごろでしたが、父が西海岸の中心都市のひとつで、北部に位置する恵須取町（えすとるちょう）〔現：ウグレゴルスクなど〕にある大平炭鉱（たいへいたんこう）に転勤となりました。これを受け、私は家から歩いて30分ぐらいのところにあった、樺太公立大平尋常小学校に

転校しました。この地のことでまず思いだすのは冬の通学風景で、雪が積もると道がみえなくなり、学校まで続く大平原をまっすぐ歩いて通っていました。住んでいた家は大きく、家のまわりで、家族で花や野菜づくりをして楽しんでいました。育てた野菜は、品評会で優秀賞や一等賞をとったりしていました。あと、私はお稽古事としてお琴を習っていたのですが、親に「習いたい」というと、親は張りきって琴の産地で有名な広島県の福山から、かなりいいモノ（福山琴）をとり寄せてくれました。

ところが、1941年12月8日に太平洋戦争が勃発し、こうした平穏な日々も次第に破られていくこととなります。ときにクラスで兵隊さんたちの宿舎を訪問して、お琴や踊り、歌などで慰安することもありましたが、まだ小学校の4年生だったこともあり、戦争の影を感じることはあまりありませんでした。

翌1942年の夏前のことですが、父が鉦長として知取炭鉦に復帰することになったので、5年生になっていた私も前に通っていた小学校に戻りました。前年の1941年4月に国民学校令が施行されて、校名は樺太公立知取第三国民学校に変わっていましたが、1944年3月にそこを卒業しました。

そのころの生活の様子で記憶に残っているのは、やはり冬の寒さです。冬場は本当に寒く、水があつという間に凍っていました。外にでれば、すぐに眉毛やまつげが凍りつき、目が開きにくくなってしまいます。とはいえ、そこは子どものすることで、雪が降ればスキーをし、雪が固まって凍るとそりをして遊んでいました。そりは得意で、父のコーチの元、猛スピードをだしていました。そりといえば、クリスマスの話になるのですが、ケーキはいつもならだいたい配達してもらっていたのですが、クリスマスには馬そりに乗って父といっしょに買いにでかけることにしていて、その日がくるのをとても楽しみにしていました。

他方、夏は、夏休みを利用して社宅に住む何家族かが集まって貸し切りバスでいちご狩りにでかけ、短い夏を惜しむかのようにいっしょに食事をしたりしていました。少し話はそれますが、内地⁵⁾にいた人の話を聞くと、戦時中は食べものが不足してなかなか厳しかったといいますが、樺太はサケやマスなどの魚介類も豊富で、ずっと豊かでした。

それから、夏になると、知取には相撲の巡業がくることがあり、そのときは家族総出でみにいっていました。ある日のことです。取組の途中でトイレにいきたくなり廊下を歩いていくと、突然脇の部屋の戸が開いて、目の前にお相撲さんが現れました。虚をつかれたのと、お相撲さんのあまりの大きさにびっくりして、大泣きしたことがありました。あと、サーカスがくれば、足を運んでいました。

学校生活では、6年生のときのことですが、川向うにあった樺太公立知取第一国民学校から火の手があがり、やがて建物が炎に包まれていくのがみえて、校内中が騒がしくなったことを覚えています。今回インタビューを受けたとき、火災が起きたのは1943年11月24日のことで、高学年のあった校舎が全焼し、同級生にあたる6年生23名が焼死した⁶⁾と聞かされて、今さらながらそんな災難が起きていたのかと驚かされました。お葬式には、学校代表として男女数名が選ばれ、私もそのひとりとして参列しましたが、ただただ涙がこぼれるばかりでした。改めてご冥福をお祈りいたします。

——小学校6年生のとき、親元を離れて樺太庁豊原高等女学校に進学することを選ばれたそうですが、どのような経緯があったのでしょうか。

小学校の6年生になったときのことですが、家で女学校への進学の話がでました。父は、子どもの交流の幅や将来の可能性を広げたりすることを考えていたようで、私は地元の女学校ではなく、樺太南部にある中心都市で、島内で唯一の市である豊原市（とよはらし）〔現：ユジノサハリンスク〕にあった、名門の樺太庁豊原高等女学校にいつてはどうかとすすめられました。このとき、兄が樺太庁豊原中学校に進学していたことも、私の豊女への受験を後押ししました。

そこで、夏休みを利用して、友達2人とあわせて3人で学校をみにいきました。その日の晩は、父の知人だった豊女の等力（結婚後は、越沢）利子先生のお宅に3人そろって一泊し、いろいろお話を聞いたりするなかで、全員この学校を受験することを決めました。

合格発表は、新聞紙上でもなされていたのですが、冒頭に私たち3人の名前があり、地元では3人が成績上位者を占めたなどという話になって、ひと騒ぎがあったことを思い出します。実際は、先生が受験申請書を吹雪で配達が遅れることのないようにと早めに送っていたため、受けつけ順で私たちの受験番号が3～5番となったのですが、1番と2番が不合格だったため、私たちがくりあがって掲示されたというのが事の真相でした。今となつては笑い話ですが、事実がわかると友人などは拍子抜けしていました。ともあれ、両親は、2人の子どもを豊原に通わせることができることになって、とても安心していました。

2) 高等女学校生活のはじまりから日本への引き揚げまで〔1944年4月～1947年5月：15歳まで〕

——樺太庁豊原高等女学校の学校生活は、どのような感じで流れていたのでしょうか。

1944年4月、晴れて豊原高等女学校に入学しました。同級生は200名ほどで、松・竹・梅・蘭・菊の5クラスがあり、私は梅組でした。制服は、いつの時代でも女学生にとって気になるものですが、時代が時代なので、リボンがついたセーラー服ではなく、戦時中の女学生が一般的に着ていた標準服でした。

学校では、毎日講堂で、全校朝礼がありました。講堂正面の、向かって右側の壁には、1ヶ月ごとだったような気がしますが、万葉集や百人一首に収録された和歌のなかからその時節に応じた一首が選ばれ、それを畳一畳ほどのサイズの紙に習字の先生が書きあげたものが掲げられていました。整列がすむと、音楽の先生が弾くピアノにあわせて、それをみんなでうたっていました。その調べは今でも覚えていて、たとえば「久方の 光のどけき 春の日に～」と聞きなれた旋律とともにそのときどきの季節感を呼び覚ましながら、自然と口についてでてきます。とはいえ、入学当初は、変体仮名で書かれていたのでなかなか読めず、先輩たちについていくのがやっとでしたが、慣れてくると、とても心地よくうたえるようになりました。その後、校長先生のお話がありました。あと、記憶が定かではないのですが、校歌も斉唱していたと思います。当時は知らなかったのですが、校歌は戦時下用のものになっていました。

戦時中ならではのこととしては、毎月8日の大詔奉戴日には、樺太神社や護国神社に全校生が並んでお参りをしていました。これは、中学校や師範学校、医学専門学校なども同

じでした。

学校行事では、1年生の冬のようですが、スキーの遠乗り大会、今でいうならクロスカントリー大会があり、1位になったこともいい思い出となっています。

それから冬には、軍隊に毛皮を提供するために、1日だけ山でウサギ狩りをしたことがありました⁷⁾。ウサギは、木の下に雪が積もらないところによく隠れているので、そのまわりを木の棒でたたいて、追いだして狩りをしていました。みんなイヤイヤというのではなく、ワイワイいいながらやっていました。いよいよ捕獲する段となって逃げられたりして、キャーキャーいったりしていた私たちを尻目に、男の先生方がしっかり捕まえていたのを思い出します。結局、この日の収穫は5匹でした。

2年生になった春には、戦争で季節労働者が兵にとられてこなくなったので、勤労奉仕で数日ほどイモ畑にじゃがいもの植えつけにいったことがありました。そこでは、みんな横一列になって鍬で土を起こしていくのですが、私は鍬の握りがみんなと違って逆だったので、先生からふりあげた鍬がぶつかりあわないように列の左端に移るようにいわれました。そこで、畑の左端に移動したのですが、その土はみんなが踏みつけて硬くなっていて、鍬をいれるのがとても大変でした。畑仕事はくたびれましたが、作業がおわると予想外のこととしてバターのプレゼントがあり、帰り道はみんなけっこう弾んでいました。

このように日常のなかにポツンポツンと戦争を感じさせる非日常的なこともありました。あとは比較的落ち着いた日々が続いていました。

——樺太庁豊原高等女学校では、寄宿舎生活となりましたが、どんな様子だったのでしょうか。

豊女に入学と同時に、はじめての寄宿舎生活もスタートしました。私の部屋は、校舎続きに建っていた第一寄宿舎にありました。寄宿舎では、1室(部屋)あたり4、5名で生活をするのですが、基本的には構成メンバーは1年生から4年生が各1名で、加えて専攻科の生徒もいました。各部屋では、4年生が室長をしていました。上下関係は厳しく、とくに室長の命令は絶対でした。各学年は、髪型をみれば、一目で区別できました。1年生はおかつぱ頭で、2年生は前髪をわけたおかつぱ頭にしていました。3年生になるとやや長くなった髪を後ろの2ヶ所で結び、4年生になるとその髪を三つ編みにしていました。学年末に近づくと、室長から次の学年の髪型に備えるために散髪にいつでも短くしすぎないようにと注意がありました。

それから、毎日寄宿舎の大風呂に室ごとに入るのですが、洗髪は髪が抜けるとお風呂が汚れるというので、洗面所のお湯で洗うようにいわれていました。冬には水道が凍ってしまうことがあり、そのときは街の銭湯に行くようにいわれました。宿舎に戻るころには、帽子からはみでた髪はパリッパリに凍っていました。洗濯は各自が洗い場をするのですが、母から寄宿舎に入ったら洗濯は自分でするようになるからといわれ、事前に練習をしてから寄宿舎に入りました。洗濯物は、温室のような干し場があり、そこで乾かしていました。

宿舎の部屋には、窓際に5人が座れる一続きの長机がとりつけてあり、向かって一番左に室長が座り、続いて1年生から順に並んで宿題などの勉強をしていました。室長からは、いろいろと教えていただきました。その際に、よい成績をとるようにという指導もありま

した。どうしてか疑問に思って尋ねたところ、「先生から室全体の成績がよいと室長の指導がよいとほめられ、逆に悪いと指導の至らなさを指摘されるし、あなたたちも先生に成績のことでほめられたほうがいいでしょ」といわれ、納得させられました。宿舎では朝晩に点呼があり、夜は9時で、9時半には消灯になるのですが、試験の前などは、よい成績をとるために室長から押し入れに明かりをもちこんで勉強するようにといわれ、夜遅くまで励んでいました。

室長にほめられたことといえば、ストーブのことがありました。宿舎には1年生が先に帰っていることが多いのですが、先輩たちが戻ってくるまでに、友達といっしょにストーブにくべる石炭を各部屋にある炭入れ（炭箱）に運んでおきました。部屋に戻ってきた室長から、「この石炭を運んだのは」と声をかけられ、「ハイ」と返事をしました。小学校時代には上級生たちが下級生たちの教室に石炭を運ぶのを仕事にしていたこともあり、あまり考えずにやったことでしたが、私は一瞬室長の指示なしにしたので叱られると思いました。ですが、逆に気が利くとほめられ、ホッとしたのを覚えています。

寄宿舎生活では、1年生にとってはなにかとはじめてのことが多く、ストレスがたまりました。しかし、そこはまだ若い女の子の集まりのこと、私たちは先輩たちが部屋に戻ってくる前に内緒でお菓子を食べたりして、ストレスを発散していました。宿舎はお菓子の持ちこみは禁止だったので、実家から送られてくる荷物には入れられませんでした。そこで、豊中に通っていた兄が近くに下宿していたので、兄のほうに送られてきたお菓子を宿舎にこっそりもちかえり、1年生でわけて食べたりしていました。みんなもいろいろもちこんでいて、そんなときは、いつも以上におしゃべりに花を咲かせていました。

——1945年の8月9日のことですが、終戦間際になってソ連が日ソ中立条約を破って対日参戦し、8月11日には北緯50度線をこえて南樺太に攻めこんできました。8月15日にポツダム宣言受諾が布告されますが、攻撃は8月25日にかけて続きました。当時の様子を教えてください。

2年生になった夏のことです。次第に戦況が厳しくなってきたことを受け、これまでであった1クラス用の大きな防空壕だけでは心もとないということで、2人用だったと思いますが、校庭のまわりに小さな防空壕をつくることになりました。

しかし、それが完成する前に、終戦を迎えることになりました。8月15日のことですが、その日も完成間近になった防空壕を仕上げようとワイワイいいながらつくっていると、先生たちが急に「重要な放送があるから」といって、私たち2年生は校内にあった大きい部屋に集められました。そこで、正午からラジオで流された玉音放送を聞くことになったのですが、聞きとりづらく、そのあとにあった先生方の話で終戦を知りました。

その直後のことですが、学校側から、いつ鉄道がとまってしまうかわからないし、学校では責任がとれないからということで、地元出身者以外はすぐに大事なものだけをもって、いついつ発の汽車に乗って親元に帰宅せよという指示がでました。寄宿舎では、普段生徒たちはお金をもつことができず、散髪などで入用のときは申請すると舎監の先生が各自の親から預かっているお金のなかからだしていただけることになっていたのですが、そのときはとにかく汽車賃とお弁当代ぐらいに必要なお金だけを渡され、防空頭巾と身のまわり

のものをつめた手荷物ひとつで帰されました。このときは、校内の空気が一変し、みんな自分のことで精いっぱいだったと思います。学校を去るときはもうここには戻れないのかなとは思いましたが、事態の急変に呑みこまれてしまい、まだその場の深刻さを受けとめきれずにはいませんでした。

本当に慌ただしくて、細かいことや人のことまでは覚えていないのですが、北方の敷香町(しすかちょう)〔現:ポロナイスク〕からきている生徒のなかにはもう親元には戻らず、先生に引率されて、すぐに北海道に向かった人もいました。このとき、引率した先生はというと、生徒を見送るともう樺太には戻らなかったようです。同級生のなかには、北海道や内地に戻ってもいくあてがないため、そのまま樺太に残った人もいましたが、ほとんどの人がさまざまな変遷をへて、引き揚げていくことになりました。この日を境に、学校生活だけでなく、私たちの生活も急変していきました。

私はといえば、1944年の夏前に、父が知取炭鉱から西海岸のなかほどに位置する泊居町(とまりおるちょう)〔現:トマリ、ノボショーロヴォ〕にある大栄炭鉱(たいえいたんこう)に鉱長として転勤していたため、そちらに向かいました。帰途の車中では、気持ちの整理もつかないまま、とりあえずいつものように友達とおしゃべりをしていたように思います。

父によると、玉音放送があつていく日もたたないうちに、ソ連軍が炭鉱に進駐してきたそうです。ソ連の関心は、もっぱら石炭の採掘にありました。このため、炭鉱の採掘現場のことについてよく知っていて、この方面で右にでる人がいなかった父は重宝され、炭鉱のトップに任ずるといふ辞令がきて、引き続き炭鉱の仕事が続けていくことになりました。他方、事務系の人はずんずん重きをおかれず、ひどい目にあわせられた人が多かったと聞いています。

——ソ連の侵攻後は、樺太庁豊原高等女学校には戻らず、最初は樺太庁泊居高等女学校に転校したそうですが、どのような事情があつたのでしょうか。

当時の樺太は物騒で、治安はよくなく、ソ連兵は次々と日本人や日本人宅を襲っていました。身につけているものは腕時計をはじめ、これはというものは次々ととりあげられ、家のなかめぼしいものはすっからかんになるほどでした。母は、腕に何個も腕時計をしているソ連兵をみるにつけ、また家々に突然やってくるソ連兵の仕業をみるにつけ、「ソ連兵になにをされるかわからない」といい、なにかあつたときのためにと常にソ連兵に手渡すものを用意していました。これにかぎらず、本当に生きるのに精いっぱい、1日1日がことなくすぎたことがありがたいといった日々でした。

終戦から2ヶ月たった10月になっても豊原の治安がよくなるため、女の子はそこへはだせないし、当の豊原高等女学校からは自宅通学の生徒のみ通学を認めるという連絡があり、豊原に戻ることを諦めざるを得ませんでした。

そこで、大栄炭鉱にほど近い樺太庁泊居高等女学校に転校しました。家からは、鉄道を利用して通学しようと思いましたが、石炭輸送が主目的のため始発が遅く、それではとても通えなかったため、寄宿舎生活をする事になりました。ただ、ここは地元にある学校だったので、週末の土日は洗濯ものをもって自宅に帰っていました。そのときは、父が勉

強をみてくれたりしていました。制服は、例の標準服だったと思います。

泊居高等女学校には半年ほどしかいなかったこともあり、そのときのことはあまり思いだせません。思い出といえば、2年生終了時の1946年3月15日の終業式で、「学業優等操行善良」の賞状をいただいたことです。なぜこのことが思いだせるのかというと、当時は戦後のドタバタで在籍証明書をもらうことができなかつたのですが、母がこの賞状がその代わりになるからと、引き揚げ時の手荷物のなかに入れておいてくれたからです。手荷物に入れられるものはとてもかぎられていたのですが、しっかり者の母が選んだ荷物のひとつがこれで、引き揚げ後に転入手続きをする際に役立ちました。この賞状は、今も私の手元に残っています。

——続いて、樺太庁真岡高等女学校に転校されたそうですが、どのようなことがあったのでしょうか。

話は、少し迂回します。かつて日本統治下のとき、樺太の中心地は豊原で、そこでさまざまなことが統括されていました。ソ連統治下になってもそれは同じで、石炭関係の統括は日本統治下のものをそのまま引き継ぐ形で、ソ連は豊原に石炭局の本部をおいていました。そこには、樺太全体を統括する事務部門がありました。

しかし、ここにはひとつ、問題がありました。それは、大陸からのアクセスです。日本統治下では、豊原が北海道からの船の便が良かったため、樺太の中心地になっていました。しかし、ソ連統治下になると、大陸から豊原に行くには島を南回りで遠回りをしないと行けないため、不便でした。そこで、大陸からすぐにいける場所として、西海岸では恵須取に並ぶ中心都市のひとつで、豊原の西に位置する真岡町（まおかちょう）〔現：ホルムスク〕に樺太真岡石炭局がおかれました。

このとき、真岡は、本部のある豊原の連絡先（窓口）となるだけでなく、樺太全体の採掘量を把握することが期待されていました。しかし、事務方では、それがなかなかできなかったようです。そこで、現場の採掘量についてわかる人をトップに据えることになり、真岡に一番近い炭鉱だった大栄炭鉱で鉱長をしていた父が選ばれました。これを受け、5月になると、父は石炭局の役員として樺太真岡石炭局で総務を扱う部門の勤務となり、樺太全体の採掘を統括する責任者として日本人最高位につくようにという辞令がきました。

私も、父の転勤にともなって樺太庁真岡高等女学校へ転校し、その3年生となりました。かつて真岡高等女学校だった建物は、ソ連統治下では引き揚げ者を収容する引き揚げ収容所（ラーゲリ）となっていました。そのため、女学校は、解散状態になっていた小学校の建物を校舎として使っていました。ここでは、勉強ばかりとはいきませんでした。たとえば、1947年の4月ごろ、ニシン漁の季節を迎えたのですが、例年なら北海道からきていた季節労働者をのぞめず人手不足となったため、ソ連からの命令で私たちも漁の手伝いをさせられました。学校は自宅から通うことができたので、学校で勉強が十分にできない分、家で父が数学などの勉強を学校での授業に先んじて教えてくれたりしていました。登下校は、治安の不安もあり、ひとりで帰らず、友達と元気よく話をしながら帰りなさいと指導されていました。制服はなんでもよくなっていて、普通の日には例の標準服やセーラー服などを着ていたのですが、漁の手伝いにでるときなどは各自が自由にしていました。

——ソ連統治下では、多くの方が物資不足や食糧不足に悩まされていました。しかし、石原家はお父さんの仕事の関係で生活にはあまり困らなかったようですが、どんな状態だったのでしょうか。

話は少し戻りますが、真岡に移ってしばらくしたころ、私たち一家は、真岡一の金物問屋をしていて、同じ山梨県人でもあり、父の生家とはあまり離れていないところに住んでいた方がこの地を引き払うということで、住んでいた屋敷や土地、家屋、商品すべてをまるごと購入し、大屋敷に住むことになりました。そこは、真岡港と地続きで、家の正面にソ連の役所〔旧：真岡支庁〕があるような場所でした。とても便利で安全でしたが、私たちが引き揚げるまで日本人でこのあたりに住んでいるのは私たちだけでした。

そんな折、ソ連から「樺太は宝の島だ。なんでもある」⁸⁾と聞かされた移民がどんどん送りこまれてきていました。彼らはたいていが極貧で、親子で手荷物ひとつというありさまでした。とはいっても、多少のお金はあるようで、家の店頭や倉庫にあったものをどんどん買っていき、数日で品物すべてが売り切れてしまうような状況でした。

やがて、月日とともに治安がよくなってくると、ソ連からの移民が家屋をほしがり、土地・家屋が暴騰していきました。市街の中心地は、ソ連の艦砲射撃や日本軍の放火戦術などでほとんど全焼していました。父は、「ぐずぐずしていたら、いつなんどき家が没収（ダワイ）されるかわからない。そうになったら万事休すだ」と考え、先手を打って私たちは家の2階と1階の奥の部屋に住むことにし、1階の前の道路沿いの広いところはソ連人の経営するお店に、また家の裏にある倉庫は石炭局に、さらにはなればソ連軍に貸与していました。ソ連の人とは、次第に顔なじみになり、それなりの人間関係がもてるようになりました。

こうしたこともあって、配給で品物を受けとるのはそれなりに列に並ぶ必要があつて大変でしたが、不足分はなんとか手にいれることができ、物資不足や食糧不足に悩まされることはあまりなく、引き揚げまでそれほど困ることなく暮らせました。「働かざる者、食うべからず」といわれたソ連統治下にあつて、母は困っている人がいれば、表立った形にはならないようにして、その人たちの手助けをしていました。父は、母の無償の助けがすぎるので、それを心配するほどでした。

こうして経済的にはあまり困ることはなかったのですが、そこはやはりソ連の統治下であり、両親もいろいろと苦勞をしていたようです。樺太の各炭鉱では、戦時中の各炭鉱の採掘量に応じた採掘目標があり、それを達成できないと父は責任を問われ、豊原にある石炭局の本部にしばしば呼びだされていました。原因は、採掘する人がどんどん引き揚げていなくなったことが大きいのですが、そんなとき、母は父が責任をとらされて大陸に送られたりするなどへんなことにならないようにと、そしてまた真岡の家に戻ってこられるようにと、ブローチや指輪などいろいろもたせていかせていました。

——次は、引き揚げについてお聞きします。Wikipediaの「樺太の戦い」の項によると、8月15日にポツダム宣言受諾が布告されたのに、ソ連軍の南樺太侵攻はとまらず、40万人以上いたとされる日本の民間人に対して北海道方面への緊急疎開が行われて約76,000人、また自力脱出者約24,000人、両者あわせて約10万人が島外避難に成功したといわれ

ています。しかし、8月23日にソ連は樺太島以外への住民の移動を禁止し、樺太に残された民間人はソ連の統治下に入りました。このため、その人たちが戻るには、1946年12月に本格的にはじまる引き揚げ事業を待つことになりました。石原家の引き揚げは、どんな様子だったのでしょうか。

真岡での生活が1年たったころ、それは1947年の4月に入ってからのことだったと思いますが、父が老いた母の病気を理由にぜひぜひ帰国したいと申しでたところ、思ったより早く私たち一家にも引き揚げの順番がまわってきて、ソ連民政署より引き揚げ収容所に行くようにという連絡がありました。

そこで、以下の日付は母の手記によるのですが、1947年5月8日に荷車一台分を見当に荷づくりをし、家族全員でもてるだけの荷物をもって家をあとにしました。このとき、蓄財したものはほとんどおいていくことになってしまい、あとあと両親はそのことを嘆いていたのですが、当時はそれよりも一刻も早く帰国できることを望んでおり、それが実現できたことをとても喜んでいました。

引き揚げ収容所では数日待たされたものの、5月12日に赤十字マークをつけた引き揚げ船に乗ることができました。その際、父は二隻の船を代表して、ソ連のスターリンに対して感謝状を書かされました。そして、5月15日に函館港に着き、19日にさまざまな手続きがすんで上陸しました。母は、真岡を就航する前のソ連による検査も大変だったが、函館上陸前のアメリカによる検査は本当に難儀で、この場面に遭遇した人でなければ引き揚げ者の苦心の端もわからないものだとよくいっていました。上陸後は、日本の山河が懐かしく、母は涙を流していました。

私たち一家は、みそ汁に温かいご飯を食べたあと、すぐに青函連絡船に乗船し、引き続きぎゅうぎゅう詰め満員となった国鉄の東北本線に乗り換え、父の実家のある山梨を目指しました。汽車に乗ると、私が制服につけていた、豊原高等女学校のすずらんの校章をみたおじさんが、なつかしそうに声をかけてきました。新宿駅に着き、そこで父は王子製紙の本社に無事帰国のあいさつをしにいったところ、胴上げをされたそうです。それがすんだら、中央線の山梨行きに乗り換えました。21日の夜に韮崎駅に着いたのですが、もう円野行きのバスはなかったので、父の弟の文一叔父さん一家のお宅に一泊しました。

翌22日に円野に着くと、父の実家には甲府から父の兄の篤伯父さん一家が疎開しており、子ども5人を連れて帰っていました。実家は、祖母と2つの疎開一家とで15人の大所帯になったのですが、それでも蔵には米が3年分あり、私たちが引き揚げてきたことを聞きつけたご近所さんたちからもいろいろいただいたりして、生活に困ることはありませんでした。そこで少し体を休めてから、5月29日には、母の実家に家族全員で顔をだしにいき、引き揚げ記念の写真を撮ったりしました。

(2) 引き揚げ後の生活 [1947年5月～1954年3月：22歳まで]

1) 父の実家のある山梨から秋田へ [1947年5月～1949年5月：17歳まで]

——山梨まで引き揚げたものの、お父さんはそこに留まることなく、家族を残してすぐに母校の早稲田大学に向かわれました。徳子さんは、すぐに山梨県立甲府高等女学校に転入

したそうですが、どんな事情があったのでしょうか。

実家に着いたと思ったら、それほど間をおかず、父に母校の早稲田大学から声がかかりました。父はそれまで満州や樺太などの石炭開発に携わっていましたが、随時早稲田大学にその報告書を送っており、それは国に提出されていました。そのとき父は、「樺太は石炭もだけど、実は石油のほうが有望だ」という話をしていました。そうした報告を受けていた早稲田大学のほうから、それを記録にまとめてみてはという連絡が入ったそうです。そこで父は、実家でブラブラしていても仕方がないと考え、私たち家族を生活の心配をする必要のない実家に残して早稲田大学に行くことにし、すぐに東京に住んでいた父の妹の山本君代叔母さんの家に向かいました。その家は杉並区にあったのですが、東京空襲にあわずに残っていて、父はそこから早稲田大学に通って作業をすることになりました。

私はといえば、山梨に着いて1週間もしないうちに山梨県立甲府高等女学校〔現：山梨県立甲府西高等学校〕に入り、6月から4年生として通うことになりました。転入試験では、英語と数学がありました。数学は、満点でした。しかし、英語はというと、豊原高等女学校の1、2年生のときにちょっと学んだのですが、授業が勤労働員などの時間に振り替えられたり、戦後はロシア語の授業となったり、治安の悪化や転校が続いてドタバタしたりしていてろくに勉強ができず、ぜんぜん点がとれませんでした。それでも、試験官の先生から、「数学がこれなら大丈夫。英語はこれからがんばってください」といわれ、無事転入することができました。通学には、家を朝7時ごろにでて、汽車通学で甲府まで1時間ぐらいかかっていた。このとき、制服になにを着ていたか記憶がないのですが、梅雨から夏にかけての時期だったので、軽装だったように思います。

実は、このとき母は、自分と祖母の母校である山梨英和女学校に私を転入させたかったようですが、英語しか話してはいけない曜日があるという説明を受け、英語ができない私には無理ということで断念したそうです。私の人生において、英語の問題は、このあともいろいろついてまわることになりますが、これは時代の問題でもあったので、なんとか切り抜けていくことになります。

——山梨に引き揚げてきてすぐのころに田植えを手伝ったことがあり、そのときに地域の人たちから以前の石原家の様子について話を聞かされたそうですが、どんな話だったのでしょうか。

引き揚げてきたころはちょうど田植えの時期で、人手が足りなかったこともあって、田植えのお手伝いをしました。そのときにだれかれとなく、ここは昔、石原家の田んぼだったけれど、戦後農地をもっていない人にわけた土地だという話を聞かされました。

——さて、山梨での生活がはじまったものの、それからあまり月日をおかずに、家族全員で秋田に行くことになったそうですが、なにが起きていたのでしょうか。

山梨にいたのは3ヶ月ほどのことで、1947年9月2日に、父の仕事の関係で家族はそろって、秋田県の北秋田郡阿仁合町（あにあいまち）〔現：北秋田市〕に移ることになりました。当時、日本は満州や樺太などに依存してきた石炭などの資源を失って、今後の国家戦略として資源をどう確保するかがありました。そこで父は、早稲田大学の恩師である藤井

鹿三郎先生のお世話で、国の仕事で国内の鉱脈の再調査にあたることになり、手始めの仕事として阿仁合に出向き、古河山一炭鉱（ふるかわやまいちたんこう）の顧問⁹⁾となったようです。父にとっては、改めて一からのスタートとなりましたが、戦後復興期において日本国内の石炭資源開発をリードしていく仕事に着手しました。

これを受けて私は、甲府高等女学校にはほんの数ヶ月通っただけで、阿仁合に移りました。阿仁合では、母が私を家の近くにある女学校にいれようとしたら、引き揚げ者は減級する（1年下の学級に入る）ことになっているといわれたそうです。そのことに我慢ならなかった母は、有名校だった秋田県立大館高等女学校に私をつれていき、面接試験を受けて無事に合格し、10月16日からこれまで通り4年生として通うことになりました。学校は大館にあったのですが、阿仁合から通学するのはなかなか大変でした。まず阿仁合の家を朝5時半にでて、鷹ノ巣駅で支線から本線への乗り換えを含めて2時間以上かかりました。このとき、兄も秋田県立大館中学校への編入試験に受かったので、2人でいっしょに通学していました。制服は、例の標準服かセーラー服を着ていたように思います。

ところで、翌年度は高等女学校の5年生になるはずでしたが、そうはなりません。1947年4月の学制改革で旧制から新制への切り替えが行われましたが、その際に学校制度の大規模な変更をもたらす混乱を軽減するために、1950年ころまでさまざまな移行措置がとられました。それによる高校再編の影響で、1948年4月に大館高等女学校は校名が変わり、新制の秋田県立大館桂高等学校〔現：秋田県立大館桂桜高等学校〕となり、その2年生となりました。大館中学校のほうは、新制の秋田県立大館鳳鳴高等学校となり、兄はその3年生となりました。

こうして阿仁合には、1年9ヶ月ほど住むことになりました。やがて炭鉱で石炭が順調にとれるようになって仕事が落ち着いてきたとき、地元の中学校から父のところに、先生が足らなくなって困っているのを教えていただけないかという話がもちこまれました。そこで父は、先生が見つかるまでということで、1、2年生の英語や数学の授業をもつことになりました¹⁰⁾。母によると、さらに校長をしていた人が古里で僧侶になるために急に職を辞したことで、その代理も務めることになったそうです。

2) 父の転勤にともない、島根へ〔1949年5月～1950年3月：18歳まで〕

——お父さんの仕事の関係で、秋田を1年9ヶ月ばかりで去り、次の任地である島根に移られています。これまではずっと女学校（女子校）でしたが、当地ではじめて男女共学校の島根県立松江高等学校に通うことになりました。そこは、どんな様子だったのでしょうか。

1949年5月になると、父は再び藤井先生の指示で、矢田炭鉱（やだたんこう）の鉱脈調査をすることになり、島根県東部で松江市と隣接する八束郡竹矢村（ちくやむら）〔現：松江市〕に引っ越しました。これにともない、私は同年4月に校名変更があった島根県立松江高等学校〔現：島根県立松江北高等学校〕の全日制普通課程の1期生となる、3年生に転入することになりました。通学は、朝7時20分ごろに家をでて、朝夕に通勤通学者用に運行されているバスに乗って、45分ぐらいかかっていました。朝の便はいいのですが、なにか用事があつたりして帰りの最終便に乗り損ねると、家に帰るのに歩いて2時間あまり

かかっていました。そんなとき、炭鉱の荷運び用のトラックがいい具合に松江市内から竹矢に戻ってくるタイミングとあうと、運転手さんが私に気づいて拾ってくれ、とても助かりました。

当時、松江高校の女子は、紺系統のセーラー服（既製服）に、同色の細い紐のようなネクタイをしていました。とはいうものの、その時分はセーラー服ならなんでもいいということだったので、私はこれまで着ていたセーラー服に、大きな白いネクタイをつけて通っていました。学生鞆には、革製の赤い手提げ鞆を使っていました。その鞆は、秋田から松江に向かう途中で東京の英雄おじさんの家に立ち寄った折に、おじさんの息子さんからいただいたものでした。せつかく東京にきたのだからとその人に連れられて浅草見物にでかけたのですが、通りがけの店で鞆を売っているのをみて、鞆がないでしょうといわれたのでうなずくと、手提げ鞆を買ってプレゼントしてくださりました。この鞆は、他の女子生徒がもっていない風合いのものでした。卒業後に開催された同窓会などでは、私が相手のことを知らなくても、相手はあなたのことは服と鞆でよく覚えているといわれたものです。

ところで、松江高校は、私がはじめて通う男女共学校となりましたが、実際は女子校にいたようなものでした。というのも、開校当時の松江高校は、2つの校舎を使っていたからでした。両校舎とも、いずれも1948年4月にそれぞれ男子校と女子校として開校し、翌春には共学化して松江高校となった学校の建物でした。具体的には、男子は島根県立松江第一高等学校〔旧：島根県立松江中学校〕が使っていた北校舎（赤山校舎）に通っていたのに対し、女子は島根県立松江第二高等学校〔旧：島根県立松江高等女学校〕の建物で、戦後に急造された南校舎（西川津校舎）で学んでいました。実質的に男女共学校となったのは私たちの2年下の1年生からで、市内を松江大橋がかかる大橋川で南北にわけて、北校舎には橋北居住者が、南校舎には橋南居住者がそれぞれ通学していました。

さて、3年生ですが、男女比をみると、普通課程には男子が211名、女子が84名在籍していました。女子の比率は28.5%で、約3割といったところでした。また、別科〔旧：松江市立高等学校／元：松江市立高等女学校〕があり、女子92名が在籍していました。全体でみると、女子は176名で、45.5%という状態でした¹¹⁾。当時は戦後の混乱期でもあり、学制の変わり目ということもあり、旧制のまま卒業したり、家庭の事情で卒業できなかった人がいたりして、とくに女子はその傾向が強かったです。

——松江高校では、学年別のクラス編成はなく、全学年混合のホームルーム編成だったそうですが、どういうことだったのでしょか。

私が通っていた南校舎では、理由はわかりませんが、生徒たちは学年ごとのクラス編成ではなく、3学年混合のメンバーで集まるホームルーム編成になっていました。私は26ルームでしたが、担任が家庭科の先生だったので、ホームルームは普通教室ではなく、昇降口を入れてすぐ左手にある階段をのぼったところにあった、特別教室の家庭科室が割り当てられていました。ルームメンバーは、2、3年生は女子ばかりで、1年生は男女でワイワイしていました。ホームルームでは、朝の会と昼食時に全員が集まっていました。そして、授業時間がはじまる前になると、それぞれが受講している授業ごとに三々五々に散っていきました。帰りはそれぞれバラバラで、おわりの会をするというようなことはなかったと

思います。

——松江高校時代の思い出として、大山を縦走した記憶が鮮明だそうです、紹介してください。

家庭科室をですすぐところに数段の上り階段があり、その先には美術の先生の部屋がありました。ある日のことですが、そこにおられた錦織保久先生から、どこから転校してきたのかと声をかけられました。いろいろ話すなかで、通学途中に新大橋から清々しい川風にあたりながら眺める大山の眺望のよさについての話になりました。大山は、西のほうからみるとその山容が富士山に似ていることから、出雲富士と呼ばれていることなどを聞いたりするなかで話が広がり、両親が山梨出身で富士山が身近だったことなどを話したりしました。

すると先生から、「夏休みに仲間たちと大山を縦走することになっているが、あなたもいっしょに登りませんか」と誘われました。私もぜひ登山を試みたいと思い、参加することにしました。現在、縦走路は崩落の危険性が高いことから利用を控えるように呼びかけられていますが、当時はそんなことはありませんでした。いざ縦走しだすと、一歩踏みだすごとに足元が滑って山肌が崩れていき、ヒヤリとしました。しかし、そのときのドキドキ感やヒヤヒヤ感などは、とても思い出に残るものになりました。

それから、松江高校の先生方とのやりとりで記憶に残っているのは、英語の授業についてです。とにかく英語ができないので、先生には事情を話して授業ではあてないようお願いしたところ、卒業するまで一度もあたることはありませんでした。

——当時、終戦後の混乱のなか、1948年4月の学制改革で私立11校と公立1校の新制大学が認可されたのを手はじめに、翌1949年5月の学制改革を受けて、新制大学が200校以上誕生しました。こうした状況のなかで、島根大学教育学部に進むこととなります。それまでは、女子の大学への進学機会がかぎられていましたが、大幅に門戸が開かれました。どんな感じで進学を決めたのでしょうか。

一般的に高校3年生といえば就職か進学かを考えることとなりますが、当時の女子はそうした選択肢はあまりありませんでした。世間的には、女子の大学進学は少人数でした。たとえ進学しようとしても進学機会は、たとえば、東北帝国大学〔現：東北大学〕や広島文理科大学〔現：広島大学〕など、一部の大学にかぎられていました。

しかし、私がちょうど3年生になったときのことですが、1949年5月の学制改革で新制の国立大学が一気に各地につくられ、女子の進学機会が大幅に広がりました。私の家では、父は娘の大学進学についてこれからは必要だという考えで、大学への進学を全面的に後押ししてくれました。

とはいえ、そのときは、どの学部や学科を受けるかはあまり考えていませんでした。なんとなく、これまでも女子の進学先として多かった師範系なのかなあという感じで教育学部を選び、新制大学発足と同時に一足先に兄が入学していた島根大学を受けることにしました。

そうと決めたものの、どこの大学を受けるにしても、合格するのは厳しいと思っていま

した。松江の地にくるまでにすでに女学校を5回転校（樺太で3校、山梨で1校、秋田で1校）していたこともあり、あらゆる勉強がずっと中途半端になっていました。各学校での試験などは、友人たちにノートを借りて、なんとか受けるというようなありさまでした。すでにお話しましたが、とくに英語の点数がとれる気がしませんでした。

で、迎えた大学入試ですが、案の定というか、英語の試験問題にはまったく歯がたちませんでした。そこで、答案用紙には、答えが書けない理由を日本語とロシア語で記述しました。英語ができない理由としては、前にも少し紹介しましたが、戦時中は豊原高等女学校での英語の授業が勤労奉仕や防空壕づくりなどの時間に振り替えられたことと、戦後の混乱期は変化に富んだ生活のなかで転校も多くて十分に勉強できなかったことをあげました。またロシア語で書く理由としては、戦後はソ連の侵攻を受けてロシア語の授業がはじまり、そこで簡単な日常会話を身につけたことなどを紹介しました。これで大学は落ちたと思っていたのですが、思いもかけず合格通知が届き、とてもうれしかったのを覚えています。

そして、1950年3月に無事松江高校を卒業し、4月には島根大学教育学部へ進学しました。このとき、松江高校の普通課程に在籍した同級生の女子84名のうち、短大や大学に進学した人は22名(26.2%)で、4人に1人が進学しました。ちなみに、男子は211名中133名(63.0%)で、3人に2人が進学していました。男女で比べると、女子の進学率はまだまだ低いものでした¹²⁾。

3) 島根大学時代〔1950年4月～1954年3月：22歳まで〕

——教育学部には、当初小学課程と中学課程に、それぞれ二年課程と四年課程がありました〔中学二年課程は1956年に、小学二年課程は1959年にそれぞれ募集停止〕。小学四年課程の同級生には、女子が2人しかいなかった¹³⁾ そうですが、どんな学生生活だったのでしょうか。

1950年4月、私は新制大学の2期生として島根大学教育学部に入学しました。私は小学四年課程に進学したのですが、先輩に女子はおらず、私たちがはじめての女子学生でした。いま私たちといたしましたが、同期の女子は私を含めて2人しかいませんでした。松江高校時代にできた女友達5人がいましたが、彼女らはみな二年課程に進学していました。

そんな事情を女学校時代からの家族の変遷とともに馬場純一先生（国語：のちに、島根県教育長・松江工業高等専門学校初代校長）に話したところ、先生から「あなたは四年課程の学生だが、まず二年課程の卒業証書をとって教職につけるようにして、そのまま卒業せずに四年課程に進学して、必要な単位をとればよい」といわれました。さらに、「友人関係づくりなどを考えると、この方法がよい」とすすめられました。父もそんなやり方があることを知らなかったようですが、その方法に賛成してくれ、そのようにすることにしました。同期のもうひとりの女子も、同じようにすることにしました。

そこで、二年課程の学生たちといっしょに授業を受けることになり、まず1952年3月に小学二年課程の卒業証書と小学校教諭普通二級普通免許状をとりました。そして、引き続き小学四年課程に進み、1954年3月に同課程を修了し、その卒業証書と小学校教諭一級普通免許状をとりました。

ところで、四年課程では、どこかの研究室に所属することになっていました。希望を訊かれたのですが、歴史が好きだったという軽い気持ちで、社会科教育研究室に所属することにしました。卒業論文は、私が4年生になったときには岡山大学に異動されましたが、3年生のときに指導教官だった庄司久孝先生（人文地理学）のアドバイスもあり、イギリスにおける女性解放史についてまとめました。こうした事情もあって、卒業後の教師生活では、よく社会科教育のまとめ役を引き受けていました。

当時のことで思い出すことといえば、キャンパス間の移動のことです。教職科目は外中原校舎にある教育学部で、また一般教育科目と専門科目は川津キャンパスにある文理学部で開講されていました。昼間はけっこうスクールバスが走っていたのでいいのですが、中途半端な時間にはバスの運行がなくて、移動に困りました。そんなときは、だいたい自転車通学をしている人の荷台に乗せてもらっていました。とはいえ、けっこう距離があったので、お尻が痛くなり、なかなか大変でした。

——大学2年生になったとき、ご両親は九州に移られたそうですが、生活にはどんな変化があったのでしょうか。

1951年の春、私が大学の2年生になったときのことですが、父は採掘量に限度はあったもののとてもよい鉱脈を見つけることができ、松江での仕事に一区切りがつかしました。そこで、みなさんにとっても感謝されながら松江での生活を2年でおえ、福岡県の炭鉱に移ることになりました。

その際、両親は、小中学生だった幼い弟2人だけをつれていくことにしました。どうしてそうなったかという、父はそもそも松江に異動になる前に松江以外の炭鉱からもいろいろお誘いがあったようですが、松江はよそとは異なって旧制の松江高等学校〔現：島根大学〕などがあり、この地に定着できたら子どもの教育にもよいという思いがあり、松江を赴任先に選んでいました。

その意を受けて、島根大学の1期生で文理学部の3年生になった兄と、大学2年生になった私だけでなく、さらに松江高校の1年生になったばかりの次男が松江に残ることになり、私たち3人は大学にも高校にも通いやすい場所を探し、鍛冶橋を北にわたってすぐのところの間借りをすることになりました。私が自炊生活の中心になって、3人分の食事や弁当づくり、手洗いの洗濯にアイロンがけもしていました。お風呂は、1日おきに家主さんと代わるがわる薪を焚いて、入っていました。今にして思うと、幼いころには想像できなかったことですが、本当によくやったと思います。

——卒業時に、どこで教師生活をはじめるか赴任地選びで迷われたそうですが、最終的にはどのように決まったのでしょうか。

兄は島大を卒業すると、東京の君代叔母さんを頼って松江をでていき、まずは会社勤めをはじめたのですが、しばらくしてから中学校の教師をすることになりました。叔母さんの長男が八丈島で先生をしていましたが、兄の就職にはその方の影響があったのかもしれませんが。

兄が卒業し、私は大学4年生になりました。教師になることは決めていましたが、どこ

で教師をするか迷っていました。両親のいる九州は、まったく知らないところでした。そんなとき、君代叔母さんが私にも、「東京においでおいで」と声をかけてくれました。しかし、叔母さんが誘ってくれた東京も、知らない場所という意味では、両親のいる九州と同じでした。山梨のほうからも、「こっちにおいで。こちらにすれば、いい結婚相手も探してあげるよ」と誘われていました。しかし、いくら両親の実家があり、親戚が多いところだといっても、やはりあまり見知った場所ではありませんでした。そうした知らないところで教師を務めることには、一抹の不安がありました。

そのとき、馬場先生に相談したところ、「友達がいるところに就職したらいい」といわれ、なるほど、そうだと思います。就職するなら、松江高校と島根大学時代にできた友人や力になってくださる先生方がおられる県内がいいし、加えて私の両親が住んでいる九州と友達が多くいる松江のちょうど中間あたりに位置したところがいい、ならば県西部の益田教育事務所管内がいいと考えました。当時は、教員採用試験というものはなく、大学を卒業して免許状をとると教員になることができ、さらに任地も希望先をだすことができたので、最終的に益田市に着任希望をだしました。

ところが、ふたを開けてみると、願いは叶わず、益田市に隣接する鹿足郡日原町〔現：津和野町〕にある日原小学校¹⁴⁾に赴任することになりました。背景には、石見部の教員不足問題があったと思います。石見部は、そもそも大学進学者が少ない上、教員志望者があまりいませんでした。そこで、現場の教員不足を埋めるため、正規の教諭免許をもっていない人をけっこう採用していました。こうした現状をふまえ、県の教育委員会では、教員免許をとった人ができるだけ石見部の教育事務所管内の先生になるように、人事配置をするようにしていたそうです。当時、県の教育委員会では、そうした人事を「雲石（うんせき）交換」と呼んでいたそうで、教員志望者が出雲部に集中し、石見部や隠岐への希望者が少ないため、出雲部への希望者をできるだけ石見部に広くまわすということだったようです。私の赴任先にも、そんなことが影響したのかもしれませんが。

——大学生活最後の冬休みは、一生に役立つ技術（スキル）を身につけることができたそうですが、それはなんだったのでしょうか。

大学最後の短い冬休みのことでしたが、九州の実家に戻りました。そのとき、隣の家のおばさんが洋服屋の服を自宅で縫っている方だったので、その方に服のつくり方を教えてもらって、卒業式に着るフォーマルな服として上着とスカートを、それからちょっとだけ感じた黄色のスーツを縫いました。仕上がりは、どちらもみなが驚くほど上出来でした。それらの服は、昭和40年代に雑賀（さいか）小学校につとめていたころまで、よく着ていました。

この経験は、私の一生に本当に役にたちました。その後、裁縫については、母に教わったり、さらに本で勉強したりしました。子育てをするようになってからは、なによりも子どもの服づくりに役立ちました。

——卒業前に、人生で、最初で最後のアルバイトをしたそうですが、どんな感じだったのでしょうか。

冬休みがおわり、無事卒業論文を提出して、2月を迎えたころのことです。あとは卒業式を待つばかりとなり、そろそろ下宿先の後始末などをしはじめたころ、島根大学の同級生で、のちに国立松江工業高等専門学校の教授（日本史）となられた島田成矩さんからアルバイトの紹介がありました。成矩さんは、私と同じ教育学部の2期生で、研究室も同じ社会科教育研究室に所属していましたが、中学四年課程に在籍していました。その人から、「教育委員会（の学事課高校教育係）に務めている兄のところで、アルバイトをしないかね。事務整理をする人を探しているのだから、手伝ってあげられないかね」という話がきました。そこで学事課で、2月、3月と続けて、人生初にして最後となったバイトをすることになりました。

アルバイトにしてみると、のちに松江高校が2分化してできた松江南高等学校の校長となられた飯塚一雄先生が係長でおられました。まったく面識はなかったのですが、初対面にもかかわらずまったく他人のようではありませんでした。私が松江高校出身者だとわかると、とてもよくしてくださいました。バイトをする際は、成矩さんの兄で、広島文理科大学教育学科を卒業し、若くして主事になられていた島田雅治さんが指導をしてくださいました。はじめてのアルバイトは、単純な仕事でしたが、短期間で片づけねばならぬということでした。バイトでは、思わぬ収入が入っただけでなく、飯塚先生や島田さんなどまわりの方々に親切にしてくださいました。楽しくバイトをすることができました。話は前後しますが、このとき出会った島田さんとは、のちに結婚することになります。

——卒業の日は、どんな気持ちで迎えられたのでしょうか。

1954年3月、無事大学卒業の日を迎えることができました。戦後、父は苦労の連続で、引き揚げにはじまり、国内の炭鉱調査で各地を転々とする生活が続いていて、本当に戦争がなかったらと思うと、気の毒で気の毒でたまりませんでした。

話は少しそれますが、戦後の日本は復興政策として石炭・鉄鋼の増産に力をいれていました。1951年に、父が福岡に向かった当時は、国内の石炭生産量はかなり回復していました。しかし、昭和30年代に入ると国のエネルギー政策が変わり、石炭から石油へと転換していきました。炭鉱産業がじり貧となっていくなか、大学教育まで受けさせてくれたことに、本当に頭が下がりました。母もしっかりした人で、ここまで育ててくれました。さらに、見習うべき、よき友とも出会うことができました。先生方にも恵まれました。卒業に際しては、まわりの方々に本当に感謝感謝で、ありがとうありがとうの言葉しかありませんでした。

後年、60歳を過ぎてから豊原高等女学校時代の同期の同窓会があったときの話になりますが、当時の引き揚げ者が減級などのさまざまなハンディを背負うなか、このスピードの速さで4大卒の肩書を手にいれたのはあなただけじゃないとよくいわれました。当時のことは、何度思いだしてみても、本当にみなさんに感謝するばかりです。

ところで父は、私が大学を卒業した翌年に、それはちょうど戦後復興期から高度経済成長期に移行していく時期にあたる1955年のことでしたが、年齢の問題もあり、また新規の鉱脈調査の仕事もなくなったこともあって、石炭業界から足を洗いました。その後、将来弟たちの進学でかかる学費などに備えて、福岡で小規模ながら旅館の経営をはじめ、さら

に仕事に関係するさまざまな資格をとり、食堂と煙草売店も営むようになりました。商売はとても繁盛していたようで、食品衛生優良施設として表彰を受けたりしていました。最終的には、きょうだい全員を大学にいかせてくれました。両親には、きょうだい一同、本当に感謝しかありません。

そうした生活が15年以上続いたあと、両親は寄る年波もあり、さらに父が体調を崩したのをきっかけに、1972年に旅館をたたんで埼玉県に転居しました。翌年からは兄の家族と同居し、1981年になると静岡県に住んでいた次男の家族と同居するようになりました。静岡では、母は短歌を詠んでは句集をつくったり、地域活動の一環として地域の子どもたちに、昔とった杵柄（きねづか）よろしく英語を教えたりして、生活を楽しんでいたようです。父は、晩年は体調がすぐれず寝たきりになっていましたが、1984年に亡くなりました。父の世話がなくなって身軽になった母は、翌年のことですが、7月に1ヶ月ばかり松江に泊まりにきたこともありました。少しの間のことでしたが、久しぶりに親孝行ができてよかったです。その後、何度か母が泊まりにきたり、私も1990年3月に退職してからは時間ができたので、こちらから母の様子をみにいったりしました。最後は、1994年のことでしたが、母の状態がよくないという連絡が入り静岡まででかけ、帰りがけに関西在住の長男のところに様子見に短時間立ち寄って松江に戻ったのですが、家に着いたと思ったらすぐに訃報が入りました。急ぎ喪服を手にとるととんぼ返りをして、母を見送りました。

（3）36年間の教師生活〔1954年4月～1990年3月〕：58歳まで

1) 日原小学校時代〔1954年4月～1957年3月：25歳まで〕〔担任：3年、4年、3年〕

15) 16)

——初任地の日原では、どんな教師生活が始まったのでしょうか。

1954年4月、日原小学校（3年間）に着任しました。

日原小学校ははじめて赴任した学校でしたが、いい先生方に恵まれました。日原小学校では、大学の四年課程をでてきた先生を迎えるのははじめてのことで、どう扱っていいのかわからなかったと思いますが、まわりの先生方から距離をおかれていました。「四年課程卒だから、こんなことはできるでしょ」とか、「知ってるでしょ」といったようなことは、よくいわれました。そうはいわれても、私にはわからないことやできないことがいろいろあったので、とにかくなりふり構わず「教えてください」といって、お願いをしました。そうしていると、同性で比較的年齢も近かったこともありましたが、とくに城市房枝先生と中村満子先生にはいろいろと教えていただくことができ、本当に助かりました。城市先生は2つ年上で、中村先生は20代後半といったところでした。あれこれ教えていただくなかで、距離はすぐに縮まっていきました。

5月の連休には、松江にいき、大学時代の友人や、バイトで知りあった教育委員会の方々と昼食やおしゃべりができ、島田さんとも親しくなっていました。

月日はたち、冬になると、雪がけっこう積もりました。そこで、通学路にたまった雪を雪かきして、道路脇にある溝に落としていたりしました。私もまだ若かったこともあり、子どもたちとはいっしょに雪だるまをつくったり、雪合戦をしたりしていました。そうい

えば、当時受けもったクラスの子どもたちは、終戦を迎えた 1945 年生まれでしたが、その学年の人数は少なかったことを覚えています。

ところで、昭和 30 年前後になると、食糧事情はずいぶんとよくなっていました。学校給食では、各自がごはん持参で、おかずの野菜などは地区の人や保護者の方々が持参してきたものを使っていました。そのうち、牛乳やパンがでてくるようになっていったように思います。これにかぎらず、保護者の方々にはよく面倒をみていただき、帰省するときには親元にもって帰るようと、干し柿や炉で干した鮎など日持ちのするものをもたせてくれたりして、本当にかわいがっていただきました。鮎は、日本一の清流で知られる高津川のもので、本当に新鮮でおいしく、いいお土産となりました。

それから、日原では、ひとりではじめて下宿生活をする事になりました。下宿先は、学校のすぐそばのところにありました。そこには、おばあさんがひとり住んでいました。家には、6 畳の部屋が 4 つと土間と台所があり、そのうち床の間のある部屋を貸してくださいました。

私の下宿先から 2 軒ほど隣の家には、日原小学校の同僚で、私と同年齢だった赤沼（結婚後は、阿部）和子先生が間借りしていました。その先生とは、よくいっしょに帰宅していました。朝晩のごはんは、学校からの帰り道にお店が 2 つあって、私たちの姿をみつけると向こうから「こんなものがあるよ」と声をかけてくださり、そこで材料を買いそろえ、場合によっては 2 人でわけあったりしていました。

下宿の台所には炭火を炊くところが 2 つあって、そこでおばあさんと私とで、それぞれ自分の食事の準備をしていました。ごはんの用意ができると、土間の横にある部屋の机に並べて、おばあさんと向きあって食事をしていました。そのときは、それぞれがつくったものを融通しあって食べていたのですが、私がつくったカレーやオムライスなどは、「そんなものは」といって、おばあさんが口にすることはありませんでした。私は、おばあさんがつくったお漬物や煮物をよくいただいていた。秋には、庭でとれた夏みかんもよく頂戴しました。

夕食がすむと、お風呂に入っていました。お風呂は五右衛門風呂で、おばあさんが入ったあとに入っていました。この話をするとおぼろげなようですが、赤沼先生の下宿先は家族が多かったこともあり、お風呂の順番があとになり、しかも夜の 10 時前後にならないと入れなかったそうで、ずいぶんうらやましがられました。私の下宿先のおばあさんは、その話を聞いて、「うちのお風呂に入ってもいいよ」と声をかけていましたが、本人は下宿先に遠慮して入ることはありませんでした。あれこれの話を総合すると、私の下宿生活はずいぶん恵まれていて、ラクだったように思います。

話は少しそれますが、とくに県西部は正規の教師資格をもった先生が少なかったこともあり、県の教育委員会の「雲石交換」の方針もあってか、日原小学校には、私の赴任以降、翌年には男女 1 名ずつの 2 名というように、小学四年課程の卒業生が次々と送られてきました。1 年後輩の女性は大学時代の友達でもあり、すぐに意思疎通を図ることもできました。周囲の先生方も私をみて距離感がつかめたのか、後輩たちは「四年課程卒だから」と私がいわれたようなことはだんだんなくなりました。それから、一足先にこの地になじんでいた私が先生方や地域の方々とのおつきあいやアドバイス役をすることで、後輩たちも学

校や地域にすぐにどんどん溶けこんでいったと思います。

——日原小学校時代に結婚されましたが、どんな感じで生活がスタートしたのでしょうか。

当時の女性の平均初婚年齢は、23歳前後だったと思います。私は大学の四年課程に進学していたこともあり、結婚は卒業後にと考えていました。大学卒業のころですが、数年したら結婚しようといってくれた1年上の先輩の方がいましたが、結局卒業時に縁のあった島田雅治さんと、2年あまりのときをへて、1956年5月に結婚することになりました。今でもその選択は、間違っていなかったと思っています。

さて、迎えた結婚式ですが、式だからといって特別なことはなにもなく、松江のむらくも会館の一室で、雅治さんの両親に、私の両親と母の妹の鶴田智美叔母さん、それに雅治さんの島根師範学校〔現：島根大学教育学部〕時代の恩師で仲人をお願いした近藤正樹先生夫妻とで、ひっそりと執り行われました。着物は、母が終戦前に京都の呉服店から買い入れ、引き揚げのとき、私に一式もたせてくれたもので、今も箆笥にきちんと入っています。

とはいえ、結婚はしたものの、私は日原小学校勤務であり、当時雅治さんは教育委員会から島根県立島根農科大学女子家政短期大学部〔現：島根県立大学短期大学部〕（松江市浜乃木町）に異動しており、実家のある安来市から通勤するといったことで、しばらくは別居生活をする事になりました。

2) 伊野小学校時代〔1957年4月～1960年3月：28歳まで〕〔担任：3年、4年、4年〕

——出雲部の伊野小学校に異動となり、伊野村にて夫婦の同居生活が始まりました。折しも日本は、1955年前後から1972年あたりまで続く、高度経済成長期がはじまったばかりのころです。しかし、伊野村は島根の片田舎で、その恩恵がまだ十分にはなかったようですが、そこではどんな生活が待っていたのでしょうか。

1957年の4月、私は島根半島中部の八束郡伊野村〔現：出雲市〕にある伊野小学校（3年間）に異動となりました。

そして、これを機に、雅治さんとの同居生活が始まりました。伊野村での生活はお互いに忙しく、時間をやりくりして生活をしていく必要に迫られていました。生活の基本は「衣食住」ですが、まずは「住」についてです。当時伊野村の教育長をなさっていた方のお宅のはなれを借りることができましたが、お互いにたいして家財道具を用意することなどはありませんでした。布団などは私がもっていたものですすなど、質素な形で生活がスタートしました。私の母は、「一軒家でも借りるようになったら、タンスや布団などを一つひとつ増やしていけばいい」と、そして「八端織りの座布団や布団2組分をしまう場所があるようになったら送ってあげる」といってくれ、その後つくってもらい、それは今も客用としてきちんととってあります。雅治さんはといえば、伊野村には本を少しもってきただけでした。

続いて、「衣」ですが、雅治さんは着のみ着のままのような状態で、伊野村には着替え用にすぐ必要なものをもってきただけでした。衣替えなどは、雅治さんが土日に実家に戻ったときに入れ替えをするようにしていました。日々の生活では、着替えや衣替えもですが、

それ以上に着たものの洗濯が問題でした。そこで洗濯機を買うことにしたのですが、電気は通じていても、まだ水道がついていませんでした。どうしたものかと思っていると、家主さんが裏山の湧き水をホースで届くようにしてくれ、伊野村ではじめてのことになりましたが、洗濯機が使えるようになりました。とても便利なので、大家さんのお母さんにも「どうぞ、お使いください」といったのですが、「いや、そんな大事なもの」といわれ、手をだされることはありませんでした。

それから、「食」ですが、なによりも火の確保が問題でした。当時、伊野村にはまだガスが通じておらず、家主さんの風呂場の種火をもらって炭火で料理していました。そうこうするうち、松江でプロパンガスが使えるようになったという話が耳に入り、すぐにつけることにしました。お店に問いあわせたところ、「なにせ（伊野村は）田舎のことで、ガスがなくなってもその日のうちに交換分をもっていくことはできないので、明日になってもいいですか」ということでした。「それでいい」と返事をし、これまた伊野村初のプロパンガスをつけた家になりました。食材については、学校の近くに農協があり、そこで必要なものを買うようにしていました。あと、牛乳が飲みたかったのですが、村では配達をしておらず、残念に思っていたところ、大家さんが近所の農家に話をつけてくれて、毎朝ヤギのお乳が家先に届くようにしてくれました。これには、本当に驚きましたし、ありがたいことでした。

話は少し戻りますが、プロパンガスではちょっとしたハプニングがありました。ある日の夕方、学校から帰宅して炊事場に入ったのですが、ふと気づくとボンベの上にフクロウがとまってこちらをギョロツとした目でみていて、大騒ぎになったことがありました。

——伊野小学校時代のことで思い出に残っているのは、为什么呢。

伊野小学校は家からほど近いところにあったこともあり、土日や休日になると子どもたちがちょくちょく家に遊びにきていました。そのときは、よくいっしょにドーナツづくりをしていましたが、これが子どもたちには大人気でした。たまごは大家さんの家が鶏を飼っていたのでわけもらい、小麦粉や油、砂糖、膨らまし粉などは、学校の隣にあった農協などから手にいれていました。そのころは、食糧事情は改善したものの、まだまだおいしいお菓子が少ない時代で、子どもたちは砂糖をまぶしたドーナツを本当に喜んで食べてくれました。同窓会があると、いつも決まって「先生のところで食べたドーナツがおいしかった」という話になりました。あと、天気がいいと、山越えをして一畑薬師のほうまで足をのばし、散策したり遊んだりすることもありました。当時の学校は、こんなエピソードが一番の思い出になるくらい、まだまだのんびりしたところがありました。

もうひとつあげるなら、家庭訪問のことを思い出します。家庭訪問のある日は、午前中で授業はおわり、午後からでかけていきます。家庭訪問の最終日は、村の北西部で、学校から一番遠く離れたところから通っている子どもたちがいる、日本海側の家々をまわっていました。まず、小学校から北上し、山越えをすると、今度は西に向かっていきました。当時は訪問がおわると、今では考えられないことですが、「日ごろ、子どもの面倒をみていただいているお礼です。気持ちばかりのものですが」などとといわれ、どのうちからも地域の特産物で旬の板わかめを5袋か10袋か束にしたものをいただいたものでした。最初

は普通の風呂敷に包んでいるのですが、何軒かまわるうちに大風呂敷に包み替えるほどになります。ある年のことですが、おしまいにお邪魔した家では、ここまでこられたのなら、きた道に戻るより一畑電気鉄道〔現：一畑電車〕の一畑駅（現在は廃駅）から帰ったほうがいいですよといわれ、子どもたちが手荷物をもってくれ、道案内を兼ねて駅まで山越えして見送ってくれたこともありました。駅に着くと、電車の待ちあわせで家庭訪問にまわっていた先生方と顔をあわせるのですが、どの先生も膝の上にわかめの入った風呂敷包みを抱えるようにしていました。食べきれないほどいただくので、いろいろな方におすそ分けしていました。今でも板わかめが出回る季節になると、そのときのことが思い浮かびます。この話をすると、半日でかなりの山道を歩くことになるので驚かれるのですが、そんなもんだと思っていたこともあり、とくに問題はなかったです。実際、子どもたちも、その距離を徒歩で登下校していました。とはいうものの、まわりの人からは、先生は普段でも本当にすごく速く歩くといわれるぐらいのスピードで歩いていたので、歩くのには自信がありました。

季節の食べものと登下校の話で思い出したのですが、タケノコがでてくる季節になると、子どもたちが登校がてらタケノコをとってきて、満面の笑みで誇らしげに手渡してくれたものでした。

——伊野小学校時代に長男が生まれていますが、どんな様子だったのでしょうか。

同居生活がはじまって、雅治さんは伊野村から大学に通勤することになりました。自転車で一畑電鉄の伊野灘駅まででて、電車に乗り換えて北松江駅〔現：松江しんじ湖温泉駅〕までいき、そこからバスで大学まで通っていました。そして、翌1958年4月に、雅治さんは農科大学短期大学部から島根大学教育学部（川津キャンパス）に異動しました。

1959年の春には、長男が生まれました。共働きのなか、子育てをどうするかは悩みの種でしたが、家主の奥さんから、「近くに年配の女性がいて、その方はとてもいい人で、自分の子どもでもない子を2人も育てているけど、ちょうど下の子が1年生になって手が空いたところよ」という話があり、紹介していただきました。そして昼間は、その方に面倒をみてもらうことになりました。しかし、赤ちゃんには授乳が必要だということで、9月ぐらいまでですが、学校の昼休みにはお乳を飲ませに連れてきてもらうことができ、本当に子育てが助かりました。学校では、子どもたちが次々と赤ん坊の顔をのぞきこみ、みんなにこにこしていました。

——伊野小学校の卒業生で、のちのちその人の人生の節目に立ち会うことになった女性がいたそうですが、なにがあったのでしょうか。

伊野小学校で最後に受けもった伊藤（旧姓：倉橋）一美さんですが、当時からずっと年賀状を送って来ていました。彼女は、中学校を卒業後、岐阜県内の会社で働きながら定時制高校に通っていたものの、3年生のときに後先を考えずに中退してしまい、その後ずっと卒業しておけばよかったと後悔していたそうです。そんな彼女が還暦を迎えるころ、子どもが社会人となり、義母の介護もおわり、自分の時間をもてるようになったことと、折しも2010年に島根県立宍道高等学校に定時制課程が設置されたのを機に一念発起して

受験勉強をし、午後部への進学を決めました（山陰中央新報 2010）。ご主人からは、「定時制に通うのは大変だよ。学歴なんか気にしなくていいよ」といわれたようですが、最後はご主人を説得して進学しました。

入学式には、ご主人が「照れくさいから参列しない」というので、私が代わりに出席しました。そして、4年間で無事課程を修了したときも、卒業式に私が参列しました。在学中には、定時制高校の弁論大会に出場し、島根県大会で優勝して東京での全国大会に行くなどの学習成果を次々とあげ、ついにこの日を迎えられることは、私にとってもとても誇らしいことでした。彼女にはいろいろ悩みがあったようですが、還暦をすぎてもなお教を請い、学びを重ね続け、なにかふっきたように前に進もうとする姿がとても印象に残っています。生涯学習時代が本格化していることを改めて実感しました。

今は、先生のように、健康で長生きしたいといってくれています。

3) 来待小学校時代〔1960年4月～1964年3月：32歳まで〕〔担任：5年、3年、4年、3年〕¹⁷⁾

——来待（きまち）小学校への異動を機に、松江市内に住むことになり、やがて長女と次男が生まれています。このころ、日本は高度経済成長期を本格的に迎えていきますが、生活にはどんな変化があったのでしょうか。

長男が生まれた翌年、1960年4月に中海の南に位置する八束郡宍道町〔現：松江市〕にある来待小学校（4年間）に異動することになりました。

そこで、雅治さんとともにお互いの通勤に便利なところを探し、松江市西部にある乃木駅近くに居を移しました。そこは、かつては関西随一と評された松江競馬場〔1929年～1937年〕があった場所の外周にあたり、住居が立ち並ぶところの外側や楕円の内側はあたり一面に田んぼが広がっていました。ちなみに現在は、田んぼの姿は消えてすっかり住宅地になってしまいましたが、全国的には唯一、今も生活道路がかつての走路の痕跡を完全に残していることで知られています¹⁸⁾。

さて、転居先では、そのお宅の2階を借りたのですが、幸いにも家主の奥さんが長男の面倒をみってくれることになりました。ご主人はとても子ども好きで、夕方に仕事場から戻ると長男を膝にのせたりして、とてもかわいがってくれました。大家さんの家には洗濯機がなかったので、風呂場の脇に我が家のものをもっていき、使ってもらっていました。子どものおむつなどは、昼間に大家の奥さんが子どもの面倒見ついでに洗ってくれていました。私たち夫婦のものは、夜、洗濯をしていました。

転居にともない、家から乃木駅まで歩いてでて、そこから来待駅まで汽車に乗り、そこでバスに乗り換えて学校まで通勤することになりました。それぞれ15分ぐらいずつかかり、待ち時間を含めると、合計で1時間あまりかかっていました。ただし、土曜日の帰りだけは、バス時間の都合があわず、駅まで徒歩になりました。

1961年には長女が生まれ、子ども2人の子育てで、以前にも増して生活が忙しくなっていました。時間がないなか、家では教材研究や家族とおしゃべりをしたりしながら、また通勤時には汽車の乗車時間や乗り換えの待ち時間を利用したりしながら、時間をみつけてはいろいろ編み物をしていました。毛糸ではきょうだいおそろいの冬物のセーターや手

袋、靴下などを、またレース糸ではテーブルセンターや花瓶敷などを、あれこれ編んでいました。大家さんのところにはミシンがあったので、それを使わせてもらって、長女のひもおとし（山陰地方では、七五三のこと）のときに着る洋服もつくったりしていました。時代的には数年あとの乃木小学校時代の話にはなりますが、長男が小学校を受験するときにはスーツの上下を用意したりしていました。母の千佐子は、教師をやりながらミシン仕事をこつこつやっているのを知って感心しながらも、やはり負けず嫌いの気性がでていると思っていたようです。

夏休み明けの9月から、長男を母衣町にあった保育所に預けることになり、雅治さんが自転車で送り迎えをしながら通勤するようになりました。11月になると雅治さんは、少しでも時間をつくるために、当時はまだ珍しかったスクーターを購入しました。折しも、時代は高度経済成長期を迎え、冷蔵庫やテレビなどの家電製品（便利グッズ）が次々と発売され、さまざまな手間が省けるようになりました。これで、生活のやりくりがなんとかできました。

1962年の12月末から1963年1月にかけて長期間にわたって大雪に見舞われました。いわゆる「三八豪雪」ですが、大変は大変でしたが、樺太に比べるとそれほどでもなかったかもしれません。長男は、かまくらをつくって、楽しんでいました。

1964年には、次男が生まれました。そこで、長男に続いて長女も母衣町の保育所に預けようとしたのですが、「手狭で、もうこれ以上子どもを預かれない」とのことでした。どうしようかと思っていたところ、寺町に新しく保育所ができたことを受け、長男も長女もそこに預けることにしました。とはいえ、スクーターに乗せられる子どもはひとりだけだったので、保育所の送り迎えを朝晩に2往復ずつ計4回する必要があり、雅治さんはとても大変そうでした。

——さて、学校では、先生が初任地の日原小学校に勤務されていた1956年からですが、戦後最初の全国学力調査がはじまりました。背景には、経験を重視する戦後の「新教育」が、読み書きや算数といった基礎的能力の低下を招いているのではないかと危惧されたことがありました。1961年から1964年は悉皆調査が行われましたが、高度経済成長期であったこともあり、教育の場をゆがめる弊害が指摘され、1966年には全国学力調査自体が中止となりました。先生の勤務校では、なにか影響があったのでしょうか。

全国学力調査については、とくに意識したことはありませんでした。個人的には、教師生活を通して、基礎学力、なかでも勉強するとすぐに点数となって成果が現れる算数は、子どもたちに自信をつけやすいので、とくに力をいれて教えていました。子どものときから父に算術や数学を教えてもらっていたこともあり、その重要性は肌で感じていました。そこで、ガリ版で問題を刷って、反復練習などにとりくませていました。

来待小学校では、はじめて高学年の5年生のクラスを受けもったのですが、当時の教え子たちと思い出話をすると、先生には「体育もいいけど、なによりも算数をがんばりなさい」といわれ、「とにかく算数をがんばった」という話が決まったようにできます。

——来待小学校時代は、戦後復興期から高度経済成長期へとどんどん移行していく時期で

した。とはいえ、地域によってその様子はいろいろだったと思います。なにかエピソードがあれば教えてください。

高度経済成長期を迎えた時代がらみのこととしては、私には直接関係はなかったのですが、来待小学校で2年目となった1961年の夏を迎えたときに印象的なことがありました。それまでは、6年生になると宍道湖で泳ぐ授業がありましたが、この年は大腸菌がらみの水質悪化で泳げなくなりました。5年生のときに受けもった子どもたちのときで、とても残念がっていました。

それから、これは来待小の児童たちとは直接関係はないことですが、戦後復興期の象徴的な話として、学校によっては田植え期や稲刈り期には「農繁休業」と呼ばれるものがありました。宍道小学校区と来待小学校区をかかえる宍道中学校には、この当時はまだ農繁休業がありました。子どもたちが貴重な労働力として期待されていたことが窺えます。

4) 乃木小学校時代〔1964年4月～1967年3月：35歳まで〕〔担任：4年、5年、6年〕 ——乃木小学校時代に自宅を建てたそうですが、どんな生活になったのでしょうか。

次男が生まれてすぐのことですが、私はその年の4月に松江市内の乃木小学校(3年間に異動となりました。これで、通勤はラクになりました。

しかし、今後のことを考えて、できるだけ家族全員が通勤や通学・通園などに便利なところに家を建てて住もうということになりました。そこで、1965年5月に島根大学にほど近く、田んぼや畑の宅地化が進みつつあったところに自宅をもつことになりました。

——橋北に自宅を建てたことで、橋南にある乃木小学校への通勤は大変になったと思いますが、どうしていたのでしょうか。

乃木小学校は、自宅から通うには交通の便がよくありませんでした。そのときのことですが、北堀橋の南側のたもと近くから、当時乃木小学校から歩いて10分足らずのところにあつた島根県立松江商業高等学校行きの直通バスが、行きは朝8時発で、帰りは夕方5時発で1便ずつでていることがわかり、それに乗ることができました。片道、だいたい40分弱ほどかかったと思います。

朝はだいたいこれでいいのですが、夕方は用事が長引くと帰りのバスに乗れなくなったので、そんなときは上乃木町まで歩いていき、そこから市バスに乗って帰っていました。これだと、家に帰るまでに1時間以上かかりましたが、いいこともありました。

夕方遅くなる帰り道では、部活のおわった子どもたちといっしょになりました。バス停までの道すがら、子どもたちからいろいろな話を聞いたり、勉強の面倒をみたりしていました。そして、バス停に着くと、みんなでバイバイをしていました。これにかぎらず、いろいろな意味で子どもたちとの会話が密でした。そのせいか、このとき教えた子どもたちの学力は、とくに算数の力は予想以上についていて、全国学力調査の結果は市内でもトップクラスだったようで、教育委員会が注目したと聞きました。それから、そのバスは自宅から少し離れたところにあるバス停で降りるのですが、すぐそばには歯医者があつて帰りがけに治療に寄れたり、帰る道すがらスーパーマーケットの前を通るので買い物もできたりして、よくないことや不便なことばかりではありませんでした。

——家族全員が通勤や通学・通園などに便利なところに家を建てたということでしたが、お子さんたちの通学・通園風景にはどんな変化があったのでしょうか。

長男は、この年の4月に小学校に入学していたので、家ができて大型連休に引っ越すまでの1ヶ月あまりはバス通学となりましたが、それ以後は高校まで自宅近くの学校に通うことができました。長女は、以前長男を預けていた母衣町の保育所に移り、引き続き雅治さんがスクーターで送り迎えをしていました

ところで、雅治さんは、このころから県内や県外での仕事がどんどん増えて、そのための移動の時間を少なくすることもあり、1966年の10月には普通自動車の免許をとり、スクーターに代わって車を購入しました。大学の教官では、はじめての自動車通勤者になったようです。これにともない、長女の送り迎えは自転車でするようになりました。

1967年の4月になると、長女は1年間ほど幼稚園に通うことになりました。翌年、長男と同じ小学校に入学して以後は、高校まで長男が進学した学校に次々と通学することになりました。

一番の問題は、生まれたばかりの次男のことでした。そこで、雅治さんと話して、最初はとりあえず子どもたちが小学生の間まではと考え、お手伝いさんをお願いすることにしました。まずは、住みこみで若い女性をお願いしたのですが、理由もいわずにすぐにやめてしまうという緊急事態に見舞われました。そこで、次の人がみつかるまでの間、窮余の策として私は次男を背負ってスクールバスに乗り、降りたところから以前に住んでいたお宅に預けて、そこから学校に向かうことにしました。しばらくして、といってもほんの1、2週間ほどのことでしたが、「通いで昼間だけならいいですよ」ということで、近所にお手伝いをしてくれる年配の方がみつきり、ホッとしました。我が家の事情を知ったその女性から「夕食の準備もしてもいいですよ」という提案があり、買い物もお願いすることになりました。思わぬ助け舟がでて、これで家事はずいぶんと助かりました。

そして、これは少し先の話になるのですが、私が乃木小学校から次の雑賀小学校に異動してから1年後の1968年4月になると、次男は長女が通った幼稚園に通いはじめ、2年間すごしたあと、長男と長女が通ったのと同じ小中高に進学していきました。

今、こうして伊野小学校時代から乃木小学校時代にかけてのことをふりかえってみると、共働きで、しかもお互いに通勤などにかなり時間をとられて大変でしたが、まわりのサポートに恵まれ、夫婦とも学校のことも家のことも本当によくやっただと思います。

——乃木小学校時代には、ある児童との出会いが印象に残っているそうですが、なにがあったのでしょうか。

当時は、人々の所得がどんどんあがり、学歴社会がすすんでいく時代で、これといった学習塾がほとんどなかった島根では、親のもつ学校への期待には大きなものがありました。私もそれにこたえたいと、さきほどもお話したように、クラス担任として機会をみつけては子どもたちに基礎学力をつけさせようとがんばっていました。

しかし、教室のなかを見渡せば、いろんなタイプの子どもたちがいました。そのなかに、今や名俳優で知られる佐野史郎くんがいました。佐野家は幕末から松江で代々続くまち医者の一族で、史郎くんへの期待は大きかったのですが、史郎くん自身は別の方向を向いて

いました¹⁹⁾。史郎くんとの縁は異なるもので、あれから 30 年近くたった 1995 年の 3 月 19 日のことですが、TBS 系列の番組で落語家の笑福亭鶴瓶さんと渡辺真理アナウンサーが司会をするご対面番組、「感激！ ウォンテッド・今、ときめきのご対面」の収録で再会しました。その番組のふれこみは、人生の節目をふりかえるたびに思いだし、さまざまな影響を与えた人や、会いたいと思いつつ機会のない人たちの出会いと再会を実現するというもので、具体的には芸能人や著名人がぜひ会いたいと思っている人を調査し、みつけだすまでの過程を映像で紹介し、感激の対面を伝えるというものでした。久しぶりに立派になった史郎くんに会い、いろんな思いが交錯したのですが、つくづく人の人生とはわからないものだと思います。番組は、地元では 4 月 5 日に BSS 山陰放送でオンエアになりました。

その後、この番組の収録があったことで、ある事件に巻きこまれそうになりました。実は、収録当日は東京に宿泊したのですが、翌日の 3 月 20 日に地下鉄サリン事件が起きました。朝、宿をでて松江に帰るために電車に乗ろうとすると、駅の入り口が混雑し、ダイヤがずいぶん乱れていました。なにごとかと思ったものの事情がわからず、あまり気にも留めませんでした。そして、そのまま空港につき、無事松江に戻ることができました。そして午後のニュースで、事件があったことを知り、驚きました。

ともあれ、乃木小学校ではじめて 6 年生の担任をしたのですが、当時は女性の先生が高学年を、とくに 6 年生を担当するということはあまりなかった時代で、少し力んでいたかもしれません。

5) 雑賀小学校時代 [1967 年 4 月～1974 年 3 月 : 42 歳まで] [担任 : 3 年、4 年、3 年、4 年、5 年、3 年、4 年]

——雑賀小学校に異動になったころ、3 人の子育ては大変なときを乗り越えて一息ついたものの、学校ではいろんな研究会があり、今度はそちらのほうでどんどん忙しくなっていたと聞いています。たとえば、雑賀小学校に着任したときは、2 年前に「全日本健康優良学校日本一」に選ばれた余波が続いており、全国の先生方が次々と授業参観にこられていたようですが、そんなときはどうされていたのでしょうか。

1967 年 4 月になると、雑賀小学校 (7 年間) に異動となりました。引き続きバス通勤となりましたが、今度は停留所がいずれも乗り降りに便利なところにあり、これで通勤がずいぶんラクになりました。

人の記憶とはおもしろいもので、戦後のドタバタで生きることに必死だったときはともかく、大変だったときのことはよく覚えているものです。子どもが小さくて子育てが大変だったときはそのことを思いだすことが多いのですが、雑賀小学校とそれに続く城北小学校時代にはそれも一段落つき、それに代わって学校の大変さがだんだん印象に残るようになっていきました。時代的にも、学校がどんどん忙しくなっていた時期でした。

とくに忙しかったのは、着任してすぐのときでした。というのも、2 年前の 1965 年 11 月に雑賀小学校が「全日本健康優良学校日本一」表彰を受けて、翌 1966 年 10 月には全日本健康教育発表大会が開催されていました²⁰⁾。私が赴任したときもその余韻が残っており、全国から先生方が授業参観に相次いで訪れていました。もちろん、体育の授業を中心にみ

ていただくのですが、学校全体でどういう授業が行われているかということも重要で、体育以外の授業もみていただくこととなります。そこで、私がもっている社会科の授業も参観対象となり、なにかとその準備に追われました。

このときは、もちろん校長先生のリーダーシップのもとで先生方が学校全体として動いていたのですが、大規模校ゆえの問題もあり、校長先生や教頭先生だけでは目が行き届かないことがありました。私は自分の授業準備も大切だったのですが、学校全体の流れなどをみつつ、問題点などがあれば、いつも以上に率先して現場の声を届けるようにしていました。たとえば、これはどうなっているんですか、あれはどんなふうになっていますかなど、うまくいっていないことや忘れられていることを指摘したり、それをどうすれば解決できるかを考え、これまでの学校ではこんなふうにしていましたなどと提案したりしていました。

そうこうするうちに、子育てのほうで、大きな変化がありました。1970年に、次男が小学校にあがってしばらくしてからのことです。子どもたちがみんな小学生になり、しかも次男の自立心が旺盛でひとりでお留守番ができるというので、頃合いを見計らってお手伝いさんにはやめていただきました。

さて、雑賀小学校勤務の最後の年となった1973年度は、雑賀小学校開校百周年ということで「自ら求め、つきとめる学習のかまえ」という研究主題が設定されました。そこで、各教科部で最低2名以上が公開授業をすることになり、社会科部は授業研究を年に3回することになりました。社会部員は6名いましたが、そのうち2回を私が担当しました。当時私は4年生のクラス担任でしたが、公開授業は中学年のまとめ役をしていたこともあり、3年生と4年生のクラスで授業を行いました²¹⁾。

——子どもさんたちとの思い出で残っていることを紹介してください。

特別なこととしては、1968年の春休みのことですが、社会科の研修を兼ねて、東京見学にいきました。そのときは、見学の帰りに私の両親が生まれ育った山梨の地を子どもたちにもみせたいと思い、3人の子もいっしょにつれていきました。東京では、東京タワーや羽田空港、科学技術館、国会議事堂などを見学しました。国会議事堂見学では、そこに知取第三尋常小学校時代に同級生だった男性が務めていて、普段はなかなか見学できない内部を案内してもらうことができました。一通り見学がおわったところで休憩するために食堂に入ったところ、長男はテレビでみていた政治家の姿を目の前にして、あそこに座っているのは〇〇、こっちに座っているのは△△など、政治家の名前を口にしながらキョロキョロしていたのを覚えています。

東京では、兄の家に泊まりました。また、松江への帰路では、山梨にある母の生家で、母の弟の小林聖之助叔父さんが住んでいる家にも寄りました。子どもたちは、家のなかに大きな蔵があるのに驚いていました。山梨では、親戚の案内で、車で富士山を案内してもらいました。ところが、あいにく途中で天候が悪化していき、高度があがるにつれて霧がたちこめはじめ、ついに道がホワイトアウトしてしまいました。対向車のライトが突然目の前にあらわれるようになり、この先にいくのは危ないということで急遽Uターンして、冷や汗をかきながら帰途についたものでした。長男にとっては、次々と目にするものが真

新しく、思い出深い日々になり、大満足のようにでした。

それから、1970年に開催された日本万国博覧会（大阪万博）には、夏休みに家族全員で車に乗ってでかけました。雅治さんの一番上の姉である山本吉子さんの家が兵庫県の宝塚市にあったので、そこを基地にして、2日間みにいきました。お祭り広場にでんと構える「太陽の塔」は、とても印象に残りました。暑いなか、アメリカ館などの人気のパビリオンは長蛇の列で入館まで何時間待ちにもなるので諦め、その代わりに待ち時間があまりなくてすむパビリオンを、来館記念スタンプ集めも兼ねてどんどんまわっていきました。子どもたちは、それはそれで楽しかったようです。

少し話がそれますが、万博で私が楽しみにしていたのは、毛筆で「日本館」と書かれた書でした。それは、乃木小のときに3年間クラス担任として受けもった天野（旧姓：平田）仁美さんが書いたもので、1969年12月に通産省主催の「万博日本館書写コンクール」で全国2位になったものでした。当時平田さんは松江市立第三中学校の3年生でしたが、雑賀小が中学校までの通学路にあったことも手伝って、帰り道にちよくちよく訪ねてきてくれていました。他の先生方からは、よその小学校出身の中学生がまた遊びにきているといった感じで、半ばあきれられるようにみられていました。ある日のことですが、彼女は習字がうまかったので、こんなコンクールがあるからだして見たらとすすめました。彼女が応募したところ、それが認められ、本当にうれしかったです。万博会場では、貴賓室に飾られていると聞いていたのですがそのような部屋はまったくなく、会場で尋ねてみると来賓室に展示されているというので、そこに足を運びました。実際にそれを確認したときは、本当にそうだったんだと実感が湧いてきて、喜びを新たにしました。

話は、戻ります。万博をみに大阪に行くことが決まってからですが、長男はセリーグのプロ野球がみたくて、高校野球の聖地でもある阪神甲子園球場にいきたがりました。しかし、当日にいきなりいこうとしてもチケットがとれないということで、パリーグの試合をしていた西宮球場に吉子さんの息子さんに連れていってもらいました。内野席に陣取ったところ、ファウルボールが勢いよく飛びこんできて怖かったことが一番印象に残ったようでした。松江への帰途に着く前に、最後にドライブがてら吉子さんの娘さんが通っていた武庫川女子大学をみにいったのですが、これまた縁は異なるもので、のちに長男がその先生になりました。

こうしてまとまった日をとって、家族がそろって旅行をするのは、この万博旅行が最後になりました。なによりもまず、私たち親が仕事で忙しかったのと、長男が中学生になると勉強があるから留守番をするといって家にひとり残ることからはじまり、みなが成長し、ひとり、またひとりと県外の大学に進学することで、その機会はなくなりました。

とはいえ、雅治さんが自家用車を購入したことは、こうした家族旅行だけでなく、日帰りで家族そろって日本海に海水浴にいったり、大山や三瓶山などに散策しにいったり、レストランや中華料理店に食事にでかけたり、ゴズ（ハゼ）釣りにいったりと、家族の団らんにおおいに役立ちました。

あと、日ごろのことですが、家でも子どもたちがいろいろ体験できるようにしていました。当時は、家のまわりは田んぼや畑が多く、自然が溢れていました。あたりには高い建物などもなかったので、東には嵩山（だけさん）が、西には松江城がよくみえたものです。

そんな景色を背景に子どもが遊べるようにと前庭は芝生にし、雅治さんは子どもたちと芝刈りをしたり、草木や花に水やりをしたり、バトミントンをしたりしていました。夏には、芝生の上を蝶々やバッタが飛び交うなか、水遊びをしたりしていました。それから、その西側で玄関へと続くところに約1メートル幅でつくった花畑では、私が中心となって季節ごとの花々を育てていました。花が咲くと、摘んできては家のなかに飾ったり、子どもたちは学校にもっていったりしていました。今では近くを流れる川の河岸が整備され、田んぼも畑もなくなってみられなくなりましたが、春になると土手や我が家の花壇の土のなかから冬眠したカメが目覚めて、這いだしてきたりしていました。家の東側では、サツマイモを育てたりしていました。また、中庭には子どもたちが水がめをおいて近所の川で捕まえてきた子亀を育てては逃げられたと騒いだり、また裏庭には小屋をつくってウサギを飼ったりしていました。家のなかでは、小鳥のジュウシマツや昆虫などを育てていました。

命の大切さを学ぶには絶好の環境でしたが、そんななか、惨劇もありました。それは、日当たりのいい日にお手伝いさんが気をきかせて鳥かごを外にだしていたら、蛇が侵入して飼っていたジュウシマツを全部丸呑みにして鳥かごからでることができなくなっていたことでした。子どもたちが学校から帰宅するまでに処理がおわっていて現場をみることはなかったのですが、話を聞いて呆然としていたようです。それから、家の近くで巣から落ちた雀の子をみつけ、親鳥があたりを飛び交うなか、段ボールの空き箱を用意してそれにいれて巣の近くにおいたことがありました。大人たちはもう助からないよといったのですが、翌朝にはいわずもがなで小鳥は死んでいて、子どもたちは前庭の隅にお墓をつくって埋めていました。子どもたちにとって動物飼育は、昆虫飼育以上に死と向きあう場となっていたようです。

それから、祝祭日などには、子どもたちに手伝ってもらいながら、手づくりのケーキや飴、クッキーなどのお菓子づくりをはじめ、アイスクリームやシャーベットなどの氷菓づくりをよくしていました。

また、習い事でしたいことがあれば、できるようにしていました。当時はよくあったのですが、長女がピアノを習いたいというので買い与え、教育学部の特音課程の学生に個人レッスンをお願いしました。やがて長男も習うようになりましたが、長続きをしたのは長女でした。このほか、長女は珠算を、次男は習字を、それぞれ地域の教室に習いにいっていました。これらはいずれも小学生の一時期のことで、中学生になるとそれぞれ部活動などで忙しい日々を送るようになりました。

6) 城北小学校時代 [1974年4月～1980年3月：48歳まで] [担任：5年、3年、4年、3年、5年、6年]

——城北小学校時代から次の勤務校となった七類（しちるい）小学校時代、さらには最後の勤務校となった法吉（ほっき）小学校時代は、くしくも1973年から1991年まで続く、安定経済成長期とほぼ重なっています。教育界では、1971年から小学校の新学習指導要領が実施され、「現代化カリキュラム」という言葉に象徴されるように、時代の進展に対応した教育内容の導入で教育内容の現代化が図られました。こうした流れのなかで、1979年度の第17回全国小学校社会科研究協議会全国大会（島根大会）が松江市内の小学校6校が

会場となって開催することが決まり、そのうちのひとつとして城北小学校が選ばれました。その際、授業発表を担当されることになったそうですが、どんな経緯があったのでしょうか。

1974年4月、今度は橋北にある城北小学校（6年間）に異動となりました。バス通勤をしなくてもよくなり、余裕をもって通勤できるようになりました。

その年のことですが、島根県社会科教育研究会は、「人間を大切にする社会科学習の再構成」というテーマを設定し、その考え方と実践の公開に向けて、実に5年あまりの歳月をかけて全国大会の準備を進めることになりました。会場は、松江市内の小学校6校となりました。このころは、新教育課程の移行期にあたり、社会科も新学習指導要領の具現化が求められており、とにかくこの大会の準備に追われ、忙しかったです。

松江市では、だいたい月に1回、教科ごとに研究会を開催しており、社会科部もそのようにしていました。そこで、まず全国大会開催に向けて部会員が集まり、はじめにどの教師が公開授業をするかを決定し、続いて会場校とそこで担当する学年をいくつか決めていきました。その過程のなかで、城北小学校で社会科主任をしていた私も担当者のひとりとして選ばれ、6年生の授業を公開することになりました。最終的には、私が担任をした5年生のクラスが6年生になったときに、公開授業をすることで話がまとまりました。私にとって6年生の担任は乃木小学校時代に続いて二度目となりましたが、それでも当時は6年生のクラスを女性教師が担任をするケースはあまりありませんでした。

迎えた大会当日は、「物語の創作をめざして、遺跡を調べ、時代に生きた人々に思いをはせる一六年「出雲の縄文時代を生きた人々」ということで授業をしました。授業では、子どもたちがとにかくとてもがんばってくれました。そのときの実践事例は、『社会科教育全書』に収録²²⁾されていますので、読んでいただくと授業の様子がわかると思います（島田 1981：160-166）。終わったときは、無事大役を果たすことができ、本当にホッとしました。

とはいえ、忙しかったのは、大会準備のためだけでなく、現代化カリキュラムの導入ということで授業が過密になっていたことも大きかったと思います。

——このころ、生け花を習いはじめたということですが、きっかけや目的はどんなことだったのでしょうか。

話は、学生時代に父たちが福岡に去って、私たちきょうだい3人が新たに家を間借りして住むことになったときまで遡ります。そのとき、向かいの家にお花の先生が住んでいて、いろいろ話を聞いたりして、興味をもつようになりました。しかし、なにかと忙しくて、本気で習うまでにはなっていませんでした。

ときは流れ、1965年に自宅を新築しました。そのとき、客間に床の間をつくったのが直接のきっかけになりましたが、そこに生け花をきれいに飾りたいと思うようになりました。そんな話を人にしてしていると、ある方が、かつては小学校の先生だったが、今は小原流を教えている中石幸枝先生という方がいることを知らせてくれました。

そこで、学校は忙しくなるばかりだったのですが、気分転換も兼ね、お花を習うことにしました。習いはじめた年がいつだったのかよく覚えていないのですが、お手伝いさんに

やめてもらったあとだったので、1970年以降の話になります。それから、1993年の4月に主たる生活の場を浜田市に移すまで、20年あまりにわたって習うことになりました。先生には、土曜日の半ドンの授業がおわった午後3時ごろにうちにきてもらっていました。

生け花は、雅治さんの仕事関係の人がよく我が家にきていたこともあり、床の間をきれいにしておくのに役立ただけでなく、玄関やトイレ、浴室などを飾る手助けにもなり、とてもよかったです。その後、1979年の夏に家を大改築して増床したときには、客間に琵琶床と網代天井をつけた二間半に及ぶ床の間をつくりました。今では、そこには生け花だけでなく、季節によってはおひな様なども飾っています。

ところで、お花がおわると、中石先生とはいつもお茶とお菓子であれこれと歓談をしていました。そのなかで、1973年の4月以降のことでしたが、先生のお宅に大学院でたての独身の若い先生が下宿しているという話がでてきました。それは、島根大学文理学部（のちに法文学部）の田中実先生（英語学）でしたが、偶然にも田中先生は雅治さんと非常勤講師の出向先と出校日が同じでした。そこで、それならその先生も我が家に呼んで、いっしょに夕食をしようということになりました。田中先生も、喜んできてくださるようになりました。先生がこられると、子どもたちもいっしょにワイワイして、楽しくすごしていました。そのときのことですが、田中先生は非常勤先でのお昼はパンですましているという話がでたので、「じゃあ、その日は子ども2人と雅治さんの3人分の弁当をつくるついでに田中先生の分も」ということで、つくってあげるようにもなりました。このとき、ご縁のできた田中先生は、1980年4月に長女が関西の大学に入学したときに、ときを同じくして母校の関西学院大学の先生として戻られ、その後いろいろお世話になることになりました。本当に、縁は異なるものです。田中先生とは、今でもお中元などのやりとりをしています。

楽しい週末だったのですが、少し前のことになりますが、1977年の4月には長男が県外の大学に進学し、さらにその3年後に長女の進学と田中先生の異動が決まり、土曜日の夕方の食卓が少しずつ寂しくなっていたことは残念でした。この動きにあわせるかのように、雅治さんも附属中学校長になって非常勤講師はしなくなり、これまでつくっていた弁当も次男分のひとつだけとなり、朝の時間の過ごし方が大きく変わりました。私自身もこのタイミングで市外の学校に異動することになり、いろいろな意味で生活が変わることになりました。

7) 七類小学校時代 [1980年4月～1983年3月：51歳まで] [担任：4年、5年、4年]
——七類小学校に赴任することになって、自動車免許をとられることになりました。その間の事情などを教えてください。

松江市内での勤務が16年続いたことで、次は市外での勤務につくことになり、島根半島東部の八束郡美保関町〔現：松江市〕にある七類小学校〔現：美保関小学校〕（3年間）に異動となりました。

ここで困ったのが足の便でした。朝はだいたい定時（7時半すぎ）のバスに乗り、1時間あまりで到着するのですが、問題はやはり夕方でした。すべきことはもちろん、やりたいことをすませてから帰ろうと思っていると、バスの便がなくなってしまい、とても困りま

した。

そこで、50の手習いよろしく、一念発起して車の普通免許を取得することにしました。一学期の終業式が近くなった7月の半ばすぎでしたが、松江城北自動車教習所に行くことになりました。

ところで、自動車通勤をするようになると帰宅時間にはまわりが暗くなるが増えるので、事前に夜道の運転に慣れる必要がありました。そこで、二学期が始まる前後あたりからだったと思いますが、路上講習にできるようになると、慣れるにしたがって夜に講習をいれてもらうようになりました。学校に務めながら免許をとるのはなかなか大変でしたが、新年明けてすぐに無事免許を取得し、さっそく軽自動車を購入しました。以後、退職するまで自動車通勤をするようになりました。

七類に行くには坂道やトンネルがあり、寒い時分には凍結する恐れもあって危なかったもので、最初の1週間ぐらいだったと思いますが、松江市内から車通勤していた同僚の先生にお願いして、朝の出勤時に落ちあって前後を伴走してもらいました。それで、もう大丈夫でしょうということになり、ひとりで通勤するようになりました。これで通勤時間が短くなるだけでなく、帰りの時間をあまり気にせず仕事ができるようになり、ずいぶん便利になりました。とはいえ、当時は女性が車で通勤するのはまだまだ少なかったです。

七類は、境港が生活圏内にありました。当時は、まだ漁村ならではののおすそ分けの文化が色濃く残っていて、車で通うようになると、朝境港にでて魚関係の仕事をして戻ってきたおかみさんや漁師さんたちから、「先生、車があるなら、魚をもってけ」とよくいわれるようになり、以前にも増して新鮮な魚をいただくようになりました。帰宅すると、玄関先に魚箱がおいてあることもよくありました。とつてもありがたかったのですが、とても食べきれず、七類からの帰りにはたびたび大学の先生方が住むアパートや知りあいの家などに寄って、おすそ分けをしていました。

車通勤では、予期せぬこともありました。七類にはほんの2年ほどしか行き来しなかったのですが、転出後しばらくすると車のボディが錆びついて、小さな穴があいたのには驚かされました。島根半島に吹きつける潮風の影響を目のあたりして、海辺の地域で生活することの一端を思い知らされました。2台目に買い替えるときは、潮風に強いメーカーはどこかなど、最初に購入したときとは別の観点から選びました。その際、車の運転にも慣れたことから、車種も軽自動車から普通自動車に乗り換えました。

話は変わりますが、七類小学校時代には、最後まで家に残っていた次男も県外の大学に進学し、家事の負担が大幅に軽減し、1日の生活が学校の仕事中心になっていきました。

——七類小学校での日々は、とても楽しかったと聞いていますが、どんな感じだったのでしょうか。

七類への異動に際しては、私には社会科のまとめ役をすることはもちろんですが、校長の八谷昭二先生からあるリクエストがでていました。確か松江教育事務所管内でのことだと思いますが、七類が特別活動の研究指定校となっていたため、その企画・運営も担当できる人ということ、これまでに培った経験を生かすことが求められていました。

実際の活動では、ここは小規模校だったので大規模校以上に教師と子どもが一丸となり

やすく、全校あげて特別活動にとりくみ、研究発表することができました。地域とのつながりも深く、1年を通じて折々にその様子を全校通信で伝えると、保護者のみなさんも行事などがあればなにかと見守ってくれて、本当に楽しく活動できました。

もちろん、これまでの経験は確かに役立ったのですが、それ以上に小規模校のよさに後押しされて、新たな経験を積むことができました。

——七類小学校に赴任した1980年といえば、小学校の新学習指導要領が実施されたときでした。そこでは、1971年に実施された現代化カリキュラムは過密な上、現場の準備不足や教師の力量不足もあり、子どもたちが授業についていけなかったなどの反省を受け、教科の学習内容が大幅に精選され、授業時間も減らされました。それは「第一次ゆとり教育」と呼ばれていますが、小学校の1、2年では生活科が導入されました。先生は、社会科のまとめ役をされていますが、なにか影響があったでしょうか。

もちろん影響はあったと思いますが、私自身は、中高学年を担当していたので、生活科が導入された低学年ほど大きな変化はあまりありませんでした。

また、学校完全週5日制が導入されたのは2002年の学習指導要領の改訂以降のことなので、当時はまだ土曜日も授業をしていました。

8) 法吉小学校時代〔1983年4月～1990年3月：58歳まで〕〔担任：3年、4年、3年、5年、6年、5年、6年〕

——法吉小学校では、とりわけ充実した教師生活を送り、思い出深く忘れられないものになったと聞いています。赴任した翌年の1984年度は、4年生対象に週2時間の「ゆとりの時間」で、勤労体験学習の一環として綿栽培にとりくまれたそうですが、まずはその様子から聞かせてください。

3年間の七類小学校勤務をおえ、市内に戻ることになりました。そして、教師生活の最後の地となったのは、法吉小学校（7年間）でした。

法吉小学校では、「ゆとりの教育」の一環で、地域や学校の特色を生かした学校行事と各学年の農園活動が定着し、「豊作を願う会」や「収穫祭」「法吉鳥（ほうきどり）祭り」など地域に根差した勤労体験学習が充実していました。たとえば、6年生は校内の田んぼで稲作をし、植えつけから収穫までの体験学習をし、「1年生を迎える会」で収穫したもち米でもちつきをしたりしていました。私のクラスでも、農園を「なるなる畑」と名づけ、なすやピーマン、じゃがいもなどの野菜づくりをしていました。

これ以外にも、さまざまな勤労体験学習に挑戦しました。ここは大規模校だけあっていろいろな先生がいて、しかも同学年の担任に有能な先生方に恵まれたことが実践を後押ししてくれました。とりわけ、「綿栽培」と「8ミリ映画製作」の2つの試みが世間の耳目を集めることになりました。

まずは、「綿栽培」についてです。1984年度は4年生の学年主任をしていたのですが、子どもたちの創造性を養うため、農園活動の新たな試みとして錦織明先生の発案²³⁾で、ちょっと変わった活動にとりくみました。それが綿栽培でした。とりあえず綿の種まきから収穫するまでの計画をざっとたて、2クラスの児童、しめて78人で挑戦することにしまし

た。

4月、錦織先生と用務員の樋口道年さんが中心となって、校内の北側にあった空き地を利用して新たに畑づくりをし、「わたぼうし農園」と名づけました。5月に入って、子どもたちは綿の種まきをしました。他学年の子たちもなにをやっているのかと関心を寄せてくれ、4年生たちはとても活動の励みになったようです。夏休みは、午前中に部活をしている子たちが率先して、交代で水やりに精をだしました。8月には、黄色の花が盛りを迎え、やがて実が付きはじめました。10月になると、実がはじけてコットンボールができたので摘みとり、段ボール3箱ほどになりました。それから、綿の実から種をとる実繰り（さねくり）をしました。

ところで、とりあえずはじめた試みだったのですが、夏休みになったときに錦織先生と相談し、ここまでできたのならせっかくなので、糸づくりにも挑戦しようということになりました。そこで、いっしょに機織りの勉強会をしたのですが、素人が糸つむぎをするのは思った以上に難しく、どうしようかと思案する羽目に陥りました。そんな折、浜がすりの伝承者で第一人者の吉岡公雄さんが主宰する山陰民芸織物研究所（米子市）に相談してはどうかという話があり、これは天の助けとばかりに、収穫した綿をもって錦織先生といっしょにもちこみました。しかし、当初の思惑は外れ、量がぜんぜん足りず、わずかな糸しかできないことがわかりました。われわれもはじめての試みで、経験不足が否めませんでした。

がっかりしていると、吉岡所長より、せっかくの機会だから、研究所のほうで足りない綿は用意して糸つむぎまではするので、ぜひ子どもたちにはできた糸を使って機織り体験をしてほしいという、とてもありがたい提案がありました。そこで、研究所のご厚意で、横糸は子どもたちが育てた糸を含めて一反分あまりをつくり、別途縦糸一反分あまりをわけていただき、さらに機織り用にと年度のおわりまで手織り機（高機：たかはた）を1台貸していただけることになりました。織り方については、秋にTSK展示ホール（松江市）で個展を開くというので、その日にあわせて11月5日に吉岡所長から全員手ほどきを受けました。用意がすべて整い、子どもたち全員、教師ともども力をあわせ、始業前や昼休み、放課後などに時間をみつけては次々と交代して、数センチずつ織りこんでいきました。子どもたちは自分の順番が待ちきれず、ウズウズしているような状態でした。

ところで、ここまでできたのなら、さらになにか形にしたいと思うようになりました。一人ひとりにハンカチぐらいのサイズの生地があるとよいと考えたのですが、一反（幅36～38cm、長さ12mほど）あまりの生地では、子どもたち全員には到底行きあたりません。そんなとき、トミーのおもちゃに織り機「おりひめ」があると知り、個人的に購入しました。学校にもっていったところ、子どもたちは興味津々で、それで織りはじめる子どももでてきました。さらに、機織り機の原理がわかった子どもたちのなかには、親子で簡易機織り機を自作して織りはじめる子まででてきました。子どもたちは、織る糸に毛糸を使うなど、いろいろなものを試していました。農園活動は、こちらの思惑をこえて思わぬ広がりを見せるようになって、親をも巻きこんで熱を帯びてきました。

紆余曲折はありましたが、これでなんとか全員分の生地が仕上がりました。生地ができると、次は玉ねぎや山ごぼうなどを使った草木染めにも挑戦しました。11月18日に開催

される学習発表会の「法吉鳥祭り」に間に合わせようと、日曜日も学校を開放して対応するほどでした。完成した作品には、テーブルセンターあり、複数の布地をつなぎあわせたパッチワークありで、色とりどりで華やかなものができあがりしました。発表会での披露も無事終了し、子どもたちには満足感と達成感で笑顔が広がりました。やがてその熱気も冷め、冬の足音が聞こえるようになった11月のおわり、わたぼうし農園を整理しました。

この一連の挑戦は、子どもたちにとって、だれもができることではない貴重な体験となりました。私たち教師にとっても、得難い体験ができました。また、素人ではするのが難しい糸づくりから機織りまでを体験できたのは、山陰民芸織物研究所のみなさんのおかげで、本当に感謝しかありませんでした。他方、所長さんも、子どもたちにまたとない体験をしてもらうことができた大喜びでした。そこで、そのお礼にというわけでないがといて、この研究所の作品のひとつで、いろいろなものをつくった折にできる残り布でできたエプロンを私にくださり、それは今も記念に大切にしています。

ところで、このとりくみは、当時綿栽培がほとんど姿を消し、機織り機をみる機会もほぼなくなったなか、昔の人の苦勞を知り、頭でっかちでない子どもを育成する試みとして、世間に報道されました。新聞では、3紙にとりあげられました（山陰中央新報 1984、毎日新聞 1984、毎日小学生新聞 1984）。テレビでも紹介されたのですが、どの番組だったかも含め、記録をとっておらず、紹介できないのが残念です²⁴。ともあれ、大きな社会的反響も得ることもでき、すばらしい1年のしめくくりの花をそえることができました。

ちなみに、錦織先生は現在、NPO 法人八雲総合サービス協会の理事で、協会が運営する出雲かんべの里の館長をされています²⁵。出雲かんべの里は、松江にある工芸館と民話館と自然の森からなる工芸博物館で、ものづくりの楽しさ、昔話のおもしろさ、豊かな自然の素晴らしさを体験することができるようになっていきます。工芸館には、5台の機織り機がおいてあるそうですが、法吉小学校時代の実践にもものづくりの楽しさの原点のひとつをそこにみつけることができるようで、本当に思い出深い日々となりました。

——法吉小学校では、社会科学習に「郷土の歴史」をとりいれていたそうですが、1987年度は地域のサポートをさまざまに得ながら「8ミリ映画」製作をされています。作品完成後は、評判を呼び、他校から貸出希望が相次いだそうですが、どのような学習だったのか紹介してください。

次は、法吉小学校でははじめてとなった「映画製作」についてです。これも「ゆとりの教育」の一環だったのですが、1987年度に6年生を担当したとき、卒業記念として戦国時代の1562年に同小付近が舞台となった、尼子氏と毛利氏の合戦を題材とした8ミリ映画製作（カラー／25分：本編23分・小道具づくりの風景紹介2分）にとりくみました。

話は、前年度の5年生のときに、戦国時代の法吉地区に住んでいた農民の生活の体験学習をしたことにはじまります。法吉小学校では、社会科学習に郷土の歴史をとりいれていたのですが、6年生では5年生のときのとりくみの延長として、今度は武士の立場から歴史をみてみようということになりました。これらの一連の学習については、5年生3クラスの担任のうちのひとりである宍道正年先生がいろいろとリードしてくださっていたのですが、今回は宍道先生から武士をテーマにした映画づくりをするのはどうかという提案が

あり、ぜひやってみようということになりました。

作業は、宍道先生が台本を書くことからはじまりました。シナリオができあがると、それを読んだセキ写真館さんが「お手伝いします。ぜひ実現させましょう」といってくれ、撮影に協力してくれることになりました。

こうして映画化に向けて、6年生94名とクラス担任3名、あわせて97人全員が一丸となってとりくむことになりました。夏休みには、時代考証をするために子どもたちを松江城に連れて行って鎧（よろい）や兜（かぶと）、刀、鉄砲、衣装などのスケッチをし、それをもとに夏休みの宿題として各家庭で手づくりしてもらいました。それから、みんなで体育館に集まって、段ボールや発泡スチロールなどを使って小道具をつくっていきました。子どもたちは、最初は元気よくやっていくのですが、とにかく暑いので、根気が続かなくなることがよくありました。そんなときは、三代喜政先生²⁶⁾はじめ担任一同、粘り強く子どもたちを励まし、なんとか完成させました。

私自身は、リーダー役は宍道先生に任せて、全体の動きや流れをみて、見落とされた部分やなにか足りない部分を補足したりして、三代先生とともに宍道先生をフォローするようにしていました。たとえば、撮影にあたっては、できるだけ本物に近づけるため、子どもたちが履くわらじやわら草履の手配に悩みましたが、事情を知った学区内の久米地区のおじいさんがわらじをつくって届けてくださったり、地区の方々から拝借したりすることができました。戦場で使う陣幕は、なかなか手に入らない代物なので、その代わりとして式典用の紅白幕を借用しました。今はほとんどみなくなった戸板は、親御さんたちが使わなくなっていたものをわざわざ修理して、提供してくれました。戦場シーンの撮影では、電線や家が映りこまない場所探しに苦労しましたが、玖夜神社（国屋町：くやちょう）の裏山をみつけ、神社の協力を得ることができました。尼子氏十旗の出城のひとつである白鹿（しらが）城が軍議の末に落ちるシーンでは、せっかくなので、今は国宝となった松江城の天守閣最上階の5階を借用できないかと交渉しましたが、撮影時間の関係もあって断念せざるを得ませんでした。代わりに、学校近くの龍雲寺（黒田町）さんが協力してくれることになりました。

2学期に入ってから、三代先生が演技の所作指導にあたり、放課後に校庭で数回ほど合戦シーンの練習をしました。撮影前日はロケ地となった龍雲寺と玖夜神社の裏山で、半日かけてリハーサルをしました。そして迎えた10月6日の撮影当日は、1日ばかりで撮影しました。

ところで、日中、合戦シーンを撮影した玖夜神社の裏山は、その先が国屋団地へと続いていて撮影音が気になったのですが、法吉小学校の初代校長（前校長）で、当時は法吉公民館長をしていた田部保富先生が根回しをしてくださり、問題なく撮影することができました。最後に軍議のシーンを撮った龍雲寺では、夕方に月がでてきて、とてもいい情景になりました。刻々と夕闇が迫るなか、予定していた撮影時間が残り少なくなっていたものの、子どもたちを迎えにきた親御さんたちから、「子どもたちの帰りが少し遅くなるが、城が落ちるシーンは月夜をバックに撮影すると雰囲気がよくでる」という提案がありました。そこで、寺の了解も得て、さらに親たちが手分けして各家庭に連絡をまわしてくれ、夜7時ごろまで撮影を続けることになりました。裏方では、教頭の名村万一先生や校務技師²⁷⁾

の恩田有二さんが小道具の運搬などを手伝ったり、さらに教頭先生は最後まで撮影を見守ってくださったりして、本当に助かりました。いざ撮影では、子どもたち全員、みんな熱心に、かつ懸命にやってくれて、迫真の演技が生まれました。これで、演技部分が仕上がりました。龍雲寺と玖夜神社は、今風にいえば、ロケをした聖地といった感じでしょうか。

あとは、作品タイトルと、オープニングやクロージングのクレジット・タイトルをどうするかでした。そこで、達筆で知られる松浦道徳校長先生にお願いすると快諾し、毛筆で書きあげてくださり、これで作品に風格が加わりました。

さて、映像、音声（ナレーションやセリフなど）、クレジット・タイトルが仕上がりました。次は、どんな効果音をつけるかでした。市販のものを使用すると著作権料が発生するので、どうしようかと思っていました。そこで、島根大学の卒業生で、安来市立第三中学校で数学を教える傍ら、シンセサイザーを使った作曲活動で全国的にも広く知られていた三保和典先生²⁸⁾が日ごろから雅治さんを訪ねて我が家に入出入りしていたのでお願いしたところ、すぐに協力していただくことができました。作品の制作意図や方向性といったコンセプトを伝え、音づくりをしてもらったのですが、映像にピッタリはまっていて、すごい仕上がりでした。とくに戦闘シーンの効果音は、臨場感をもりあげてくれました。おかげで、映像に迫力がつき、作品価値をグーンとあげることができました。

映像づくりの最期の段階である編集作業は、アートビデオさん（松江市）の協力を得ることができました。当時は松江でこの作業ができるところがなく、東京のスタジオですることになりました。その際、なによりも大変だったのは、すべての6年生が出演できているかをチェックすることで、本当に最後の最後まで心労が重なりました。

こうして、子どもたちのがんばりをはじめ、親御さんたちや地域の方々の協力を得て、さらにいろんな先生方も最後までがんばって、だれもかもがいっしょになって、8ミリ映画の卒業記念制作をすることができました。作品は、ついに『戦国法吉合戦物語 昭和62年度卒業記念制作』（昭和62年度卒業記念制作・制作協力 アートビデオ）として完成しました。

そして11月8日の法吉鳥祭りで、初上映しました。続いて、土曜日の夜に親御さんたちを集めて上映会を開催したのですが、このとき、ちょっとした一悶着がありました。いずれもこの日はじめて映像に映るわが子の姿をみた親からの発言で、「こんな（いい）ものができあがると知っていたなら、直接身に着ける鎧や兜などはもっといいものを自分の子どもにつくらせたかった」というのですが、それは後の祭りというものです。

この試みは、初上映で大反響を呼び、その様子は山陰中央新報（1987）で報道されました。評判は評判を呼び、読売新聞（1887）で紹介されたり、雑誌『総合教育技術』（1988）にもとりあげられたりして、社会的にも役立つことができ、とてもうれしかったです。

他校からは、社会科学習の参考にしたいと、貸出希望が相次ぎました。そこで、視聴しやすいようにと、VHSテープのもの（カラー／25分：本編15分・写真による児童紹介10分）も用意することになりました。こちらは、本編をかなり圧縮し、23分くらいあったものを15分にしました。作品タイトルとクレジット・タイトルは、タイピングしたものに差し替えました。2分ほどあった小道具づくりの風景紹介は、カットしました。浮いた時間を使って力をいれたのは、卒業制作ということで、アルバム化を図ったことです。具体的

には、卒業アルバムの体裁になるように、子どもたち一人ひとりが自分でつくった鎧や兜に小道具を身に着けた状態で登場し、顔をアップにして写真撮影しました。それに役柄と氏名のテロップをつけて、次々と紹介しました。

実はこの話には、後日談があります。この児童たちが卒業を迎えたのは1988年春のことですが、当時「タイムカプセルづくり」がブームになっていて、私たちもそれにのっかることにしました。まずは、未来の自分にあてたメッセージをひとりずつ木札（縦10センチ・横8センチ）に墨で書き、プラスチック製の漬物用容器をタイムカプセルに見立て、それに木札を納めました。これをもって、この8ミリビデオ製作のゆかりの地となる、松江市法吉町にあった白鹿山山頂付近の白鹿城址まで運んで、深さ約1メートルのところに埋めました。そして、理由は忘れたのですが、13年後の2001年の春に掘り出すことにしました。

ところが、旗振り役で、この企ての世話役だった宍道先生が、タイムカプセルを掘り出す時期をすっかり忘れてしまいました。そこで、当初の計画より遅れること4年、17年目となった2005年8月14日に、改めてその計画を実現することになりました。当日は、同窓生17名と宍道先生が白鹿山に登ってバケツを掘りだして、それをふもとの法吉公民館までもって下りました。そして、山頂にはいけなかった私たち40名も加わって式典を開いて、容器のなかから木札をとりだしました。腐らないように木炭を大量にいれておいたこともあり、保存状態はとてもよかったです。当時の児童も今や20代後半となって立派な青年になっていましたが、顔から笑顔がこぼれ落ちていました。式後、改めて当時制作した8ミリ映画を鑑賞し、思い出話に花を咲かせることができました。ちなみにこの様子は、翌日付けの読売新聞（2005）と山陰中央新報（2005）で報道されました。本当に、今でも当時のことがありありと思いだされ、忘れられない日々となりました。

話は少し脇道にそれますが、宍道先生は、1989年4月から1992年3月まで八束郡島根町教育委員会派遣社会教育主事となられたときに、法吉小学校のときの経験を活かして『チェリーロードわが町』[VHS]（島根町・島根町教育委員会・島根町観光協会・島根町ビデオドラマ制作委員会企画制作、1990）の映像制作をされています。この作品は、社会的にも高く評価され、教科書会社がつくっている道徳の副読本に採用され、「チェリーロード一桜を守る青年たち」という題で教材化されました（「みんなで考える道徳」編集委員会編 1992～2004）。その後、島根県古代文化センター長、島根県埋蔵文化財調査センター所長、島根県教育庁文化財課課長、松江歴史館専門官などを歴任し、今や『親子で学ぶ 松江城と城下町』（宍道 2012）でスタートした「親子で学ぶ」シリーズの著者として知られ、ライターとして面目躍如の活躍をされています。

——法吉時代は、子どもとの連絡や学校での研究物の報告を印刷物でよくするようになったと聞いています。1980年代に入ると日本語ワープロが普及しはじめ、80年代後半には小型化して価格も安くなったことで個人への導入も進み、89年には出荷台数がピークを迎えました。教育現場では、どんな様子だったのか教えてください。

教師生活がはじまってからずっと、ガリ版刷りに親しんできました。ガリ版刷りは、ろう原紙に鉄筆で書いて、木枠の刷り台に原紙を固定し、印刷用紙をセットし、スクリーン

上にインクをつけ、ローラーをころがして圧着させて、一枚ずつ紙に転写するというもので、けっこう手間暇がかかりました。

1980年代になると、次第に紙に黒のボールペンや鉛筆で書いて印刷する時代に移り変わり、原稿も書きやすくなり、印刷も高速でできるようになりました。私も就任3年目となった1985年から使用するようになり、これで作業がずいぶんとラクになりました。そうしたこともあって、学校でとりくんだ研究物はもちろん、さらに自主的な活動として学年通信や学級通信などをどんどんだすようになりました。

学年通信は、学期はじめを皮切りに、原則として月はじめに1回だしていました。赴任当初の3年間は中学年の担任をしていたのですが、そのときの発行はほぼこのペースでよかったです。ところが、次第に通信内容が膨らむようになり、その後高学年を担当するようになると、そのペースでは追いつかなくなりました。とくに6年生の担任だったときは連絡事項がたくさんあり、多い月には毎週だすような勢いになりました。学年全体で8ミリ映画の卒業記念制作をしていたときは、結局1年間で33号までだしました。内容としては、毎月の行事予定をはじめ、各種行事の案内や報告、保護者の方への連絡・報告・相談などの各種事項、夏休みなどの休暇中のこと、さらには「ゆとりの時間」の活動や社会科学学習のことなど、本当にあれこれとありました。おかげで、学級の枠をこえて、保護者の方々と意思疎通がスムーズにできるようになりました。さらに、その方々を通して地域社会の方々の学校への理解が深まるだけでなく、折々に学校への協力や支援を得ることができ、本当に助かりました。たとえば、前にも紹介しましたが、8ミリ映画制作では、子どもたちが履くわらじが必要となったのですが、なかなか数がそろわず困っていると、窮状を知った地域のお年寄りの方々が自分の家にあるものをもってきてくれたり、新たにつくってくれたりして、本当にありがたかったです。

それから、学級通信はといえば、必要に応じてどんどんだしていました。そこでは、いいことばかりを書いていたわけではありません。忘れ物対策というか、子どもたちだけでなく、保護者や私自身の備忘録も兼ねて、注意事項なども書き連ねていました。

後年、同窓会があったときに当時の学校通信や学級通信をもっていくと、よくない話もいつしか笑い話となり、さらにそれが呼び水となって当時のことをいろいろと思いだし、話がどんどん盛りあがったものでした。こうしたことができたのも、かつてのガリ版刷り時代の原稿はろう原紙を使っていたため使い捨てで、しかも印刷物も耐久性があまりなく、現在手元に残っているものはわずかなのに対して、手書き原稿で印刷できるようになってからは、とりあえず元原稿は段ボール箱に整理してしまっているからこそのことでした。今回、久しぶりに当時の原稿をひも解いてみると、自分が書いた文章ながらヘンなところがあり、苦笑いするばかりです。とはいえ、改めてあれこれと芋づる式に思いだし、とても懐かしかったです。終活の一環としてもう捨てようかと思っはいるのですが、なかなか捨てがたく思っています。

ところで、原稿を書く仕事以外にも、手を使う作業がいろいろありました。たとえば、日々子どもの日記へのコメント書きやテストの採点などがあり、腱鞘炎になるほどでした。当時は、それぐらい一生懸命になって、突っ走っていました。

もし過去に戻ってもう一度やり直せるとしたらと問われたら、身体的にはなかなか大変

でしたが、法吉小学校時代に戻り、もう一度チャレンジしてみたいです。そのときは、あれもこれもやろうとは思わず、やることを絞って、もっと思い出たっぴりな日々をしたいです。もちろん、あの時代はあの時代で自分にできることを精いっぱいやっていたので、悔いが残っていることはありません。とはいえ、無駄な力を抜いて生きていれば、もっと充実した日々にしたのではないかと思います。教師生活のなかで、そう思えるほど、本当に楽しく充実した日々を送ることができました。同僚の先生方や子どもたち、保護者の方々にも恵まれ、法吉小学校での日々はなにかやりきった感がありました。

あと、ワープロについての話がありましたが、当時は学校でワープロを使っている人はいなかったと思います。思えば、ある時代がおわりを告げるときだったのかもしれない。

——ところで、最後は定年を待たずに退職されています。そのときのことを教えてください。

定年まではまだ2年あったのですが、法吉小学校に7年務めたこともあり、そろそろ転勤となると新たな勤務校で2年ほど務めるのも中途半端になるし、なによりも主人が来春定年退職を迎えることもあり、いわゆる専業主婦も1年ぐらいは体験しておきたいなどと考えて、自分から申しでて、1990年3月に36年間の教師生活を無事おえ、退職しました。

この間、ずっと共働きでしたが、幸い子どもたちは元気に育ってくれ、私たち夫婦も健康で無事に暮らすことができ、とくに思い残すことはありませんでした。

その後、娘が大学卒業後に松江に戻ってきていましたが、しばらくして結婚して独立していきました。

——教師生活については、最後の質問になります。今やジェンダーギャップの解消ということで、女性管理職の誕生が強く望まれる時代ですが、校長や教頭になることは考えなかったのでしょうか。ちなみに1990年3月に退職された10年後のことになりますが、2000年に男女共同参画基本計画がだされ、指導的地位に女性が占める割合を高めることが期待されてきました。2021年の暮れにでた文部科学省「人事行政状況調査」によると、この年の4月1日現在で、公立小の場合、全国の女性管理職（校長・副校長・教頭）の割合は21.1%と2割をこえて過去最高になりましたが、島根県の女性管理職（校長・教頭）の割合は15.9%で全国平均よりやや低くなっています。

当時の管理職は、まわりの先生方から、とくに校長や教頭のなどの管理職の方々からチャレンジしてみてはどうかという話があって、そうしたものを目指すという感じでした。私たちの世代はまだまだ男性中心で、とくに女性校長はほぼ皆無ではなかったかと思いません。私のまわりでは、ついぞ耳にしたことがありませんでした。当時は、女性管理職のお手本となるような人（ロールモデル）が身近なところにいませんでしたし、もし自分に話があったとしても、現場で子どもたちと活動をしていたほうが楽しかったので受けなかったと思います。

それでも、私が退職するあたりから、女性校長がぼちぼち誕生している話を聞くようになりましたが、人数などの詳細はわかりません²⁹⁾。

(4) 退職後の生活〔1990年4月～〕

——退職してからはしばらく、落ち着いた生活をされていたものの、その後は思わぬ展開になったそうですが、どんなことがあったのでしょうか。

退職後は、島根県教職員互助会が退職会員に提供しているダンス教室や料理教室に通ったり、山陰中央新報社が主催する文化教室（正式名は、文化センター松江教室）で裏千家の高木信子（宗名：宗信）先生に茶道を習ったりして、楽しむ日々がはじまりました。

そして、私が退職した1年後のことになりますが、1991年3月に雅治さんも島根大学で無事定年退職を迎えました。ここから生活の新たな歯車がまわりはじめました。というのも、雅治さんが退職する直前のことですが、島根県の澄田信義知事から話があり、2年後に島根県に短大を開設するために学長候補として開設準備委員会委員長となることが決まり、新たな仕事を進めることになりました。これを受け、専業主婦業がしばらく続くことになりました。さしあたって、私の生活にはとくに変化はなかったのですが、これで老後を2人でゆっくりとすごすという生活は先送りになりました。

そして、1993年4月、雅治さんが島根県立国際短期大学〔現：島根県立大学（浜田キャンパス）〕の学長に就任したのにもない、浜田での生活がはじまりました。

3. おわりに

(1) 島田徳子氏の立ち位置のユニークさ

本稿では、インタビュー調査を通して、新制の島根大学教育学部小学四年課程の女子初の卒業生となった島田徳子氏がどのような人生を送ってきたかをみてきた。

その結果、同課程の卒業生のなかでは、彼女はかなりユニークな立ち位置にあることがわかった。それは、①樺太で生まれ、第二次世界大戦では日本本土の最後の戦いとなった「樺太の戦い」があり、その後ソ連統治下におかれた関係で、3つの高等女学校に通ったこと、②15歳で山梨に引き揚げてきてすぐに高等女学校に転入して勉学をスタートし、しばらくして引っ越した秋田では引き揚げ者対象の「1年減級措置」があったところ、実力で編入試験を突破して高等女学校生活を送るなか、戦後の学制改革による旧制から新制への移行を経験し、高校生活最後の1年を島根の男女共学校で学んだあと、新制大学の教育学部小学四年課程初の女子卒業生となったこと、③島根での36年間にわたる教師生活では、“小学四年課程の2期生”であり、“初の女子卒業生”でもあるという、二重の意味で「草分け的存在」(先駆者)となったこと、④退職後、しばらく専業主婦として生きることになったこと、などである。

(2) ドキュメントとしての価値

次に、本稿のドキュメントとしての価値についてである。本稿は、女性史や教員史、中等教育史、高等教育史、戦争史、社会史、ジェンダー論、地域研究など、さまざまな研究分野において利用できる史料として、きわめて汎用性が高いものとなっている。

そこで、その利用可能性を示すため、「第4次教育振興計画」(2023年6月16日閣議決定)に注目したい。計画では、コンセプトとして「2040年以降の社会を見据えた持続可能な社会の創り手の育成」が打ちだされ、そのなかで「Society5.0において主体性やリーダーシップ、チームワークなどの資質・能力を備えた人材の育成」がとりあげられた。このことをふまえ、「教師の資質・能力の向上」をどのように図るかについて、本ドキュメントからどのような示唆が得られるかを探してみたい。

ここでは、次の4点を指摘したい。それは、1) 教師生活をはじめるにあたって必要なこと(言葉や姿勢など)、2) 個人的に実力をつけていくとともに、まわりとともにやること、3) フォロワーシップを発揮すること、4) これまでに培ってきたものを新たなやり方に転移させていくこと・編み直していくこと、の4点である。以下では、少し言葉を変えて、これらについて説明しよう。

①自分の「学び」とまわりの「教え」のスイッチを同時にいれるにはどうしたらいいか～「教えてください」というマジックワード

島田徳子氏は、新制の島根大学教育学部小学四年課程に入学し、教育学部初の女子の4大卒という高学歴を獲得した。そして、教師として教育現場に入っていったとき、高学歴

の人というレッテルをはられて、距離をおかれて浮いてしまうことがなかったのは、ひとえに「教えてください」という言葉で自分に「学びのスイッチ」をいれるだけでなく、それを聞いたまわりの先輩たちの「教えのスイッチ」を一気にいれさせたことにあった。

このことによって、お互いの距離は一気に縮まり、教師生活をうまくスタートさせることができただけでなく、島根大学の後輩教師たちの現場デビューもしやすくなった。主体的にかつ積極的に周囲とかかわることで協働する機会をつくっただけでなく、自分の教師生活だけでなく、結果として後輩たちの教師生活にもいい影響をもたらすことができた。

②ジェンダーギャップをどう解消するか～「女性初」という枕詞

かつては、小学校の女性教師は多かったにもかかわらず、高学年の担任や管理職は男性教師が担当するというような、暗黙の了解（壁）があった。そうした了解にはいろいろあったと考えられるが、新制大学発足当時はまだ数が少なかった四年課程卒の女性教師が先頭ランナーとして走ることで、その壁を突き破っていく役を担う機会が次々と訪れ、その流れでのなかで「女性初の～」をはじめ、それに類する言葉が使われたりするようになっていった。

だが、そうした学歴はあくまでもきっかけにすぎず、事態が円滑に進むようになっていくようになるにはなによりも内実が必要になる。たんに経験年数を重ねて社会科教育の中堅やベテランになったというだけでなく、実際にそれに見合う力が認められたり、周囲に期待されたりする必要がある。それができたのは、本人がなによりも負けず嫌いでタフで前向きに生きていたからだろうし、自分だけの力ではなく、まわりといっしょに、さらにはまわりをまきこんで、クラスづくりや学年づくりをしていったからだろう。

ただし、そうはいっても、当時は校長や教頭のような管理職になるような期待（プレッシャー）はまわりからはなく、そうした人たちができるようになるのはまだしばらくのときが必要だった。

③個人として、あるいは教師集団として、どう動いていくと場を活性化できるか～「フォロワーシップ」という役どころ

まわりから管理職になるような期待がなかったことに関連するが、島田徳子氏の場合、フォロワーシップをいかに発揮するかに活動原理の中心があった。

さまざまな活動をする際に、リーダーとなる旗振り役がいるだけでは活動は広がらない。それに続く、2番手、3番手がいなければ、活動は広がってはいかない。このため、近年は、フォロワーシップが注目されている。そこでは、活動を活性化するためにいろいろな役割が期待されている。具体的には、全体や最終目的地（目標や進むべき方向）をにらみながら、仲間を勇気づけたり、支援したり、問いかけたり、まとめたりといったファシリテーションが必要になる。こうした動きをするのが、徳子氏の役どころとなっている。その際、ファシリテーターとして積極的に場づくりをすすめていたといえる。

④新たな教育理念を実現していくために、教師の資質・能力の向上をどう図っていくか～これまでに培ってきたものを新たなやり方に転移させていくこと・編み直していくこと

教師の資質・能力の向上という観点から注目すべきは、昭和 50 年代後半からはじまった「第一次ゆとり教育」で、教師にはさまざまなレベルで資質・能力の向上が求められていた。ゆとり教育の導入にあたっては、個々の教師としてだけでなく、学年ごとや学校全体の教師集団としてとりくむなかで、これまでに培ってきたものを新たに登場した録画技術や印刷技術をとりいれながら新たなやり方に転移させたり、編み直したりしていくことで、現場が活性化されていた。その際、教師たちが楽しみながら子どもの学びにコミット（かかわり）し続けた結果、その活動は社会的な注目を浴びるだけでなく、知らず知らずのうちにその後の教師の成長（資質・能力の向上）をも促していく波及効果をもたらしていた。

昨今、デジタル化の進行とともに、さまざまな分野で資質向上を目指して「リスクリング」（学びなおし）の必要に迫られ、「アンラーン」（学びほぐし）が課題となっている。これに倣うなら、従来のやり方に固執せず、新たなやり方をとりいれ、あるいはそれにとりこまれつつ、全体としてその流れを楽しみながら新たな可能性を切り拓いていくことが肝要となる。

島田徳子氏と同僚の先生方をみていると、社会の動きとともに、すでに自分もっているものに加え、新たな発想をもちこみながら、試行錯誤しつつ学びの過程と結果にコミットし（かかわり）続けている姿が浮かびあがってくる。

<引用・参考文献>

- 学級通信、1984a『法吉小4の1 太陽の子』No. 24、12月6日
- 学級通信、1984b『法吉小4の1 太陽の子』No. 25、12月7日
- 原彬久、2015『戦後政治の証言者たち—オーラル・ヒストリーを往く』岩波書店
- 石原茂、1974「樺太時代の小林」小林聖之助『金魚の呟き』晃陽書房
- 石原千佐子、1983『我が生わが旅 石原千佐子歌集』ナガハシ印刷
- 石原千佐子、1987『我が生わが旅 第二歌集』ナガハシ印刷
- からむし会（縄文時代の一日を再現する会記録編集委員会）編、1982『縄文の丸木舟、日本海を渡る—縄文時代の再現に挑んだ教師たちの記録』縄文時代の一日を再現する会記録編集委員会
- 喜多由浩、2023a「南と北の島物語 樺太と南洋統治【20】」『産経新聞』1月4日
- 喜多由浩、2023b「南と北の島物語 樺太と南洋統治【25】」『産経新聞』3月15日
- 公益社団法人やまなし観光推進機構「やまなし歴史の道ツーリズム 明治天皇駐蹕碑」
(<https://rekishinomichi-yamanashi.jp/ja/spot/1-124.html>) [2023年8月18日閲覧]
- 小林聖之助、1974『金魚の呟き』晃陽書房
- 毎日新聞、1984「綿栽培から機織りまで ゆとりの時間「学習」 松江・法吉小」11月27日（中国版）
- 毎日小学生新聞、1984「法吉織りに挑戦だ！ 松江市法吉小の4年生ら」12月4日
「みんなで考える道徳」編集委員会編、1992～2004『改訂新版 みんなで考える道徳 5年』日本標準
- 錦織明、1988「先生奮闘記⑧ 子らと種まきして栽培」『朝日新聞』9月20日
- 雑賀小学校開校百周年記念事業委員会編、1974『雑賀教育百年史』雑賀小学校開校百周年記念事業委員会
- SALAT 編、2008『同窓会会員名簿』島根大学教育学部同窓会
- 山陰中央新報、1984「一粒の種から綿製品へ 松江・法吉小 収穫終え織り機に挑戦」11月7日
- 山陰中央新報、1987「卒業記念に“自作自演”映画 松江・法吉小が製作 初上映で大反響」11月15日
- 山陰中央新報、2005「17年前の夢に再会 法吉小卒業生 タイムカプセル“開封”」8月15日
- 山陰中央新報、2010「60歳女性 学びの春 時間選択制高に入学」4月14日
- 島田徳子・福田克己・亀滝久美子、1974「社会科—授業者 島田」『さいか教育—第48年度研究集録』第29集、松江市立雑賀小学校
- 島田徳子、1981「物語の創作をめざして、遺跡を調べ、時代に生きた人々に思いをはせる—六年「出雲の縄文時代を生きた人々」島根県社会科教育研究会『社会科教育全書13 人間を大切に作る社会科学習』明治図書
- 清水優志、2022「住宅街に浮かぶ 謎の楕円 松江 90年近く前ここには…」『朝日新聞』9月22日夕刊

宍道正年、2012『親子で学ぶ 松江城と城下町』山陰中央新報社
総合教育技術、1988「卒業記念は自作自演の映画づくり—法吉小学校六年生の「戦国法吉
合戦物語」は迫真の演技で反響続々」小学館、2月号
双松会事務局編、1995『双松—松江中学校 松江高等学校 松江北高等学校 同窓会名簿』
双松会
鶴田智美、1972『野あざみ 鶴田智美記念集』サンニチ印刷
山内深紗子、2023「佐野史郎さん 多発性骨髄腫を経験」『朝日新聞』2月4日
読売新聞、1987「卒業記念に尼子・毛利合戦映画製作 松江の法吉小6年生が総出演 武
士の立場で歴史体験」11月25日（中国版）
読売新聞、2005「タイムカプセル掘り出す 松江・法吉小同窓生17年ぶり」8月15日（中
国版）
渡部圭一・芳賀和樹・福田恵・湯澤規子・加藤衛弘、2018「明治中～後期山村の生業と地
域ネットワーク—旧秋田藩領荒瀬村肝煎・湊家文書の解題と翻刻」『筑大農林社会経済
研究』第34号
Wikipedia「からむしⅡ世」
(<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%81%8B%E3%82%89%E3%82%80%E3%81%97II%E4%B8%96>) [2023年9月10日閲覧]
Wikipedia「樺太の戦い」
([https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%A8%BA%E5%A4%AA%E3%81%AE%E6%88%A6%E3%81%84_\(1945%E5%B9%B4\)](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%A8%BA%E5%A4%AA%E3%81%AE%E6%88%A6%E3%81%84_(1945%E5%B9%B4))) [2022年8月12日閲覧]
Wikipedia「知取町」
(<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%9F%A5%E5%8F%96%E7%94%BA>) [2022年10月24日
閲覧]

<注>

- 1) 戸籍上は「徳子」(旧字)だが、掲載媒体によっては「徳子」(新字)と表記されることもある。本稿では、原則的に「徳子」と表記する。
- 2) インタビューをした際、とくに徳子氏本人の幼少期や母方の両親のことを知る資料として、母の千佐子と、その弟で下から2番目の聖之助と、末妹の智美が書き残したものが提供された。千佐子のものには、2つの歌集と手記類があった。ひとつ目の歌集には「石原千佐子略歴」(石原 1983:175-177)が、2つ目には「石原千佐子略年譜」(石原 1987:138-143)が収録されており、石原家の家族史の概要を把握するのに役立った。また、手記類には、家族史の一環として徳子氏関連の記述も多く残されおり、本人の成育歴やさまざまな日付などを確認する際におおいに参照した。次に、聖之助はエッセイ集(小林 1974)を残していたが、これより小林家の歴史を知ることができた。このエッセイ集には、聖之助の手になるものと、その知人・友人たちが聖之助に寄せたものが集録されていた。聖之助は、終戦前に樺太に住んでいたが、石原家が一足先に樺太に住んでいた関係で、徳子氏の父の茂が「樺太時代の小林」(石原 1974:142-145)という一文を寄せており、そこからは石原家の樺太での生活の一端を知ることができた。最後に、智美のものとして、智美の日記や手紙などを集めて編集された遺稿集(鶴田 1972)が提供された。この本からは、小林家の家族史の一断面として姉の千佐子と妹の智美の人間関係の一端を知ることができたが、断片的な情報にとどまった。これら以外の資料としては、徳子氏本人の著書や、かつての勤務校の学校史をまとめた書籍、新聞記事、学年通信、学級通信、各種名簿、手紙などが提供された。
- 3) 公益社団法人やまなし観光推進機構のHPより、「やまなし歴史の道ツーリズム」の「甲州街道>モモ畑と歴史が紡ぐ栗原宿コース>明治天皇駐蹕碑」の項をみると、志村家は峡東地方きっての日川村の豪商であると記されている。少し話はそれるが、かくの兄の勘兵衛は、若くして志村銀行を開業した人物として、また1907年の大水害の際に救助、支援活動で活躍したことで知られているとある。続けて、志村家の屋敷跡が山梨県聖蹟となり、山梨市がその土地を継承したこと、「駐蹕碑(ちゅうひつひ)」と並んで「志村勘兵衛頌徳碑(しょうとくひ)」が建てられたことなどが紹介されている。
- 4) 千佐子が残した手記には、鈴木家の永吉大叔父とキヨ大叔母について、人を愛する心が厚く、茂のきょうだいたちが進学で上京したときは全員面倒をみてくれたが、それは親戚にかぎらず、いろいろな人の面倒をみていたと書かれていた。
- 5) 「内地」という用語だが、徳子氏の記憶によると、樺太では「樺太と北海道を除く地域のこと」をそう呼んでいたという。個人的には、「東京や、樺太以外で自分が居住した地域のこと」を指しているという。
- 6) この火事については、Wikipediaの「知取町」の項を参照のこと。
- 7) 豊原高等女学校の戦時下の青春について、喜多由浩が樺太と南洋統治について書いた記事のなかで、徳子氏の同期生(29回生)3人の語りを紹介している(喜多 2023b)。ここでも、ウサギ狩りをやったことが懐かしく思いだされている。
- 8) 「樺太は宝の島」といわれるようになったのはいつかについて、喜多由浩は「かつて酷

寒の不毛の地だった樺太は、1908年に作家・三島由紀夫（本名・平岡公威）の祖父である平岡定太郎が樺太庁第3代長官に就任して以降、それまではほぼ“手つかず”に近かった森林や炭田の開発に積極的に乗りだされ、林業、製紙パルプ工業、石炭鉱業、漁業・水産業が勃興。1925年の日ソ基本条約によって、日本が北緯50度以北（北樺太）の石油・石炭開発権を取得し、外地手当が加算された高給に引かれて北海道や東北、朝鮮などから移民や出稼ぎ労働者がなだれこむようになって、樺太の地は「宝の島」「夢の島」と呼ばれるようになった」と紹介している（喜多 2023a）。

- 9) 徳子氏によると、父の茂が阿仁鉱山周辺のどの炭鉱に務めたかについては覚えてないという。ところで、母の千佐子が残した手記には、茂は阿仁合に到着後すぐに山根の地で寝泊まりをして鉱脈調査や索道準備にあたり、家族は社宅ができるまでは一六旅館に泊まっていたことや、のちに中学校の近くに社宅ができたこと、自分自身は古河の集会所をよく利用したことなどが書かれていた。阿仁地区の案内などを行う“ふるさとあに観光案内人の会”の関係者からの話ではあるが、一六旅館は古河鉱業の関係者がよく使っており、中学校の近くにできた社宅は古河山一炭鉱のもので、古河の集会所は古河会館を指しているとのことだった。また、これらの内容は、戦後復興期に阿仁鉱山周辺にあった炭鉱の開発史をまとめた論文のなかで紹介されている古河山一炭鉱の様子（渡部他 2018：6-7）と矛盾しなかった。そこで、最終的に古河山一炭鉱を茂の勤務先と判断した。
- 10) 当時、阿仁合町周辺には、阿仁合中学校と大阿仁中学校があった。このうち、茂がどちらの中学校に務めたかは、校名についての記憶が徳子氏にはなく、また母の千佐子に残した記録にも記載がない。とはいえ、父は社宅のすぐ近くの中学校で教えていたという徳子氏の証言と、徳子氏は高校まで自宅そばの阿仁合駅から大館駅まで通っていたという事実を重ねあわせると、阿仁合中学校（現：阿仁学園／旧：阿仁中学校）と考えて間違いがないだろう。
- 11) 数値は、島根県立松江高等学校の同窓会名簿である『双松』（双松会事務局編 1995：185-193）より算出した。
- 12) 同上。
- 13) このときの島根大学教育学部小学四年課程の同期生のメンバーについては、『同窓会会員名簿』（SALAT編 2008：104）を参照のこと。
- 14) 島根県内の公立小学校は、いずれも本文で紹介するときは「市町村立」の表記を省略している。
- 15) 「36年間の教師生活」をふりかえる項目では、担任欄を設け、経年で担当学年を記している。
- 16) 徳子氏の記憶によると、2年目と3年目の担任はほぼこれで間違いのないと思われるが、当時の記録が残っておらず、不確かなところがある。本文では、第一候補を記載しているが、第二候補として〔担任：3年、3年、4年〕の可能性もあるという。
- 17) 徳子氏の記憶によると、3年目と4年目の担任はほとんどこれで間違いのないと思われるが、当時の記録が残っておらず、不確かなところがある。
- 18) このあたりの経緯については、朝日新聞に掲載された記事を参照のこと（清水 2022）。

- 19) 佐野史郎氏は、あるインタビューのなかで、小学校から高校卒業まで松江市ですごしたときのことをふりかえり、折り合いをつけ、波風立てず、争いを好まず、のれんに腕押しで、みんなに嫌われないように柳のように立ち振る舞っていたが、自分の好きなこと、大切な本質だと思うことは貫いていたと回想している（山内 2023）。
- 20) このあたりのことは、『雑賀教育百年史』を参照のこと（雑賀小学校開校百周年記念事業委員会 1974：152-155 & 315-316）。
- 21) 当時の授業記録は、『さいか教育』に収められている（島田他 1974：36-44）。なお、本書では、執筆者名の表記が統一されておらず、上下の名前がきちんと記載されているところがあれば、上の名前しかないケースもあった。ちなみに、島田徳子氏担当のところは、下の名前の「徳子」は未記載となっていた。
- 22) 本著の執筆者一覧では、「徳子」ではなく、「徳子」の表記になっている。
- 23) 錦織明先生の発案のことは、本人の回想録のなかでも紹介されている（錦織 1988）。
- 24) 学級通信（1984a）には、「綿の栽培、そして機織りに取り組んだ子ども達の様子が珍しさもあって、各種新聞やテレビで報じられ、全国の子ども達にも「毎日小学生新聞」で伝えられました」と書かれていた。新聞では、毎日新聞（1984）と毎日小学生新聞（1984）の記事についてとりあげられていたが、どのテレビで放送されたかは記載されていない。ただ、子どもたちが吉岡所長に織り方の指導を受けた場所が TSK 展示ホールなので、系列的には「TSK 山陰中央テレビジョン放送」の可能性が高い。また、翌日に発行された学級通信（1984b）には、山陰中央新報（1984）の記事について紹介され、さらに「この他 日本経済新聞にもとりあげられていました」と書かれていたが、日本経済新聞の記事については確認がとれなかった。
- 25) 錦織先生は、本稿で紹介した綿栽培の試みに先立って、1981年には、研究論文「縄文のなぞをさぐる一子どもの追求意欲をもち上げる社会科教材の開発と実践」で、第5回日本標準教育賞教師集団の部最優秀賞（からむし会）を受賞されている。この論文を基底にして、1982年には、縄文時代の丸木舟をモデルとした「からむしⅡ世号」を建造し、隠岐の島から島根半島まで漕ぎ渡ろうとする試みは、世間の注目を浴びて各種メディアで報道されるとともに、後日『縄文の丸木舟、日本海を渡る』（からむし会編 1982）としてまとめられた。この試みについては、Wikipediaの「からむしⅡ世」の項でも紹介されている。退職時には、島根県小学校校長会長や島根県社会科教育研究会副会長、八雲会理事などを務めておられた。その後は、出雲かんべの里にて、松江ゆかりの文豪・小泉八雲の作品を紙芝居にして読み聞かせ活動を展開する「紙芝居じいじ」として知られるようになり、2016年にはその活動が評価され、2016年度山陰中央新報社地域開発賞「教育賞」を受賞されている。
- 26) 三代先生は、2005年には海外にも活動の場を広げ、ハンガリーのブタペスト日本人学校の新設にともなって初代校長となり、3年間ほど学校経営にあたられた。2023年には、日本ハンガリー友好協会島根県支部の理事長に就任し、ハンガリーとの国際交流に尽力されている。
- 27) 「用務員」から「校務技師」への呼称変更は松江市の「教育委員会規則」にて定めており、この改正は1991年10月1日からとなっている。恩田有二氏によると、当時の法吉

小学校では、この改正に先立って「校務技師」の呼称が使用されていたという。

- 28) 三保先生は、1977年には「華麗なる宇宙旅行」という作品で「ソニー全日本サウンドコンテスト」(審査員特別賞・FM東京賞)を受賞し、1981年には神戸博覧会「三井館」の館内音楽を制作されたりしていた。その後も活躍は続き、1994年には北海道南西沖地震防災啓発番組【鎮魂・奥尻～水中写真家の証言～】(番組音楽担当)で平成5年度第9回文化庁芸術選奨【芸術作品賞】を受賞したり、NHKのさまざまな番組の音楽制作を担当されたりしている。
- 29) 徳子氏が退職したころは、管理職の人数については公的なデータが整備されていなかった。そこで、島根県教育庁総務課に調べてもらったところ、1989(平成元)年度の公立小の管理職者は600名で、このうち女性管理職者は66名(11.0%)にすぎなかった。具体的には、校長296人のうち女性校長は4名(1.5%)、教頭304名のうち教頭31名(10.2%)となっており、とりわけ女子校長は少なく、70名に1名ぐらいしかいなかった。近年の動向としては、文部科学省の「人事行政状況調査」によると、2022年4月1日現在の公立小学校の女性管理職の割合は、全国では37,372名中10,553名(28.2%)となっているが、島根県は387名中66名(17.1%)で伸び悩んでいる。翌2023年4月1日現在の調査では、全国では37,029名中10,918名(29.5%)と微増したが、島根県は前年には20名いた女性校長が一気にいなくなった影響もあって385名中46名(11.9%)と大幅に減少している。

ABSTRACT

Life History
of One of the First Female Graduates of the Four-year Elementary School Course
of the Faculty of Education at Shimane University:
The Case of SHIMADA Tokuko, Who Was Born and Raised in Karafuto
and Became an Elementary School Teacher in Shimane Prefecture

SHIMADA Hiroshi

The purpose of this paper is to interview a woman who was one of the first female graduates of the four-year elementary school course of the Faculty of Education at Shimane University, to find out what kind of environment she was born and raised in, and what kind of school and family life she had as an elementary school teacher, and how she lived after retiring.

In compiling her life, I divided it into four parts: (1) her childhood life in Karafuto, (2) her student life after repatriation, (3) her life as an elementary school teacher, and (4) her life after retirement. At that time, I tried to ask her to share her personal experiences in chronological order as much as possible, and to situate her talk within the social context of historical backgrounds such as World War II, the period of high economic growth, as well as trends in education such as the revision of the Courses of Study. I also tried to link her story to contemporary issues such as the Soviet invasion, the gender disparity in the teaching profession, the increasing number of busy teachers, the nature of followership in teacher groups, and the improvement of teacher qualifications.

As a result, it turned out that her life is quite unique and has high documentary value. Therefore, this paper is expected to serve as a versatile resource in various research fields such as women's history, history of teachers, history of school education, history of war, social history, gender theory, area studies, etc.

< Key Words >

Repatriation from Karafuto

First Female Graduate of the Four-year Elementary School Course of the Faculty of Education
at Shimane University

Elementary School Teacher

島根大学教育学部小学四年課程初の女子卒業生のライフヒストリー

樺太出身の小学校教師・島田徳子氏の場合

2025年1月23日 発行

著者 島田 博司

発行者 日本女子大学現代女性キャリア研究所

〒112-8681 東京都文京区目白台2-8-1

TEL 03-5981-3380

FAX 03-5981-3381
